

# 令和2年度（2020年度）調査研究事業報告書

## 生涯学習事業に係る県内の現状 及び県外の先進事例



地域の人づくり講座（菊池教室）  
～防災士のためのスキルアップ講座～  
「まち歩き」で地域の危険箇所を確認する様子



地域の人づくり講座（宇城教室）  
～わがまちを元気にしたい人 大集合！！～  
受講生同士で地域のよさについて話し合う様子

令和3年（2021年）3月

熊本県教育委員会

## 目次

はじめに	1
第1章 調査研究の概要	2
第2章 市町村の生涯学習事業の現状及び考察	3～18
第3章 県と市町村の連携事業	
1節「地域の人づくり講座」2年次経過報告	19～30
【事例1】 公民館を中心に活動する人材を育成することを目的とした講座（長洲町）	
【事例2】 地域防災のリーダーとして活動する人材を育成することを目的とした講座（菊池市）	
【事例3】 地域リーダーの育成を目的とした講座（宇城市）	
【事例4】 自治公民館の活性化を目的とした講座（津奈木町）	
2節「地域の人づくり講座」1年次経過報告	31～35
【事例5】 地域学校協働活動推進員等の人材育成を目的とした講座（荒尾市）	
【事例6】 地域学校協働活動推進員等の人材育成を目的とした講座（八代市）	
【事例7】 地域学校協働活動推進員等の人材育成を目的とした講座（玉名市）	
3節「サテライト教室」	36
【事例8】 デジタル・ディバイドの解消と仲間づくりを目的とした講座（南関町）	
第4章 コロナ禍、豪雨災害における実践例（県の取組）	37～40
【事例1】 県民カレッジ主催講座（動画配信、学生活用）	
【事例2】 第43回全国公民館研究集会・第71回九州地区公民館研究大会 熊本大会（書面開催、音声CD）	
【事例3】 学習成果活用（体験ボランティア、学習支援ボランティア）	
【事例4】 「親の学び」講座（オンライン講座、オンデマンド講座）	
第5章 生涯学習コーディネーター養成講座	41～44
【事例1】 「脱・事業のマンネリ化！～企画力で参加者を増やす5つのコツ～」	
【事例2】 「人が集まる仕組みづくり ～あなたのアイデアと地域との協働でまちが動き出す～」	
第6章 他県における人づくり、地域づくりの先進事例	45～56
【事例1】 広島県広島市文化財団安公民館	
【事例2】 高知県NPO砂浜美術館	
【事例3】 千葉県四街道市政策推進課	
〔資料〕	
市町村対象アンケート調査票	57～61

## はじめに

本年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、新しい生活様式が徹底されることとなりました。このことにより、各自治体におかれましては、生涯学習・社会教育を推進する上で、事業及び講座等が予定どおりに実施できないこともあったことと思います。

しかしながら、住民の学びを止めないために、試行錯誤しつつ学習機会の確保策を探るといった御努力に対して、深く感謝申し上げます。

また、令和2年7月豪雨は、熊本県南地域を中心に甚大な被害をもたらすこととなりました。被災された皆様方に、心からお悔やみとお見舞いを申し上げますとともに、1日も早い復旧・復興を祈念しております。

このような中、令和2年9月に第10期中央審議会生涯学習分科会において、「議論の整理」が発表されました。この中では、「多様な主体の協働とICTの活用で、つながる生涯学習・社会教育～命を守り、誰一人として取り残さない社会の実現～」に向け、生涯学習・社会教育が果たす役割が述べられ、以下の3つのキーワードが示されました。

- ① 命を守る生涯学習・社会教育
- ② ICTの活用及びデジタル・ディバイドの解消
- ③ 子供・若者の地域・社会への主体的な参画

本県においても、パンデミックや自然災害から命を守るためのICT活用能力の定着、災害に強いまちづくりのための子供・若者を含めた地域のつながりをつくることの重要性を痛感した1年でした。そこで、本県では、3つのキーワードに関連した「①地域住民の命を守るための防災土育成」、「②デジタル・ディバイドの解消に向けたスマートフォン講座」、「③子供・若者を含めた地域住民で作り上げる公民館イベント」等の『地域の人づくり講座』を市町村と連携を図って実施して参りました。改めて、本県の取組の方向性が間違いではなかったと確認するとともに、今後更なる充実に向け邁進していきたいと気持ちを新たにしたところです。

本調査研究報告書では、前述の取組を含めた県と市町村の連携事業をはじめ、市町村の生涯学習に係る現状、コロナ禍・豪雨災害における取組、他県における人づくり・地域づくりの先進事例等についてまとめさせていただきました。

本調査研究報告書が、各市町村等において活用され、生涯学習・社会教育に係る取組が尚一層充実するための一助となれば幸いです。

最後に、調査に御協力いただきました市町村教育委員会及び県外関係者の皆様方に心から感謝申し上げます。

令和3年（2021年）3月

熊本県教育庁市町村教育局社会教育課長

須惠 勝幸

## 第1章 調査研究の概要

### 1 調査の目的

#### (1) 市町村支援

市町村における学習機会提供事業の充実等、生涯学習振興の支援のため、地域課題解決に向けた学習プログラムの開発、コロナ禍・災害等に対応した取組の工夫及び県外の先進事例の情報収集を行い、市町村教育委員会をはじめとする関係機関に提供するとともに、次年度の事業に活用する。

#### (2) 市町村基礎情報収集

生涯学習推進及び社会教育行政に必要な基本的情報を収集し、社会教育課事業の基礎資料とする。

### 2 調査の対象

県内全市町村教育委員会（社会教育・生涯学習担当課：45市町村）、熊本市公立公民館（19館）

### 3 調査の実施期日

令和2年（2020年）11月16日～令和2年（2020年）12月15日

### 4 調査内容及び方法

#### (1) 県内市町村教育委員会、熊本市公立公民館に、次の点についてアンケートを依頼

- 主催事業について
- 学習成果活用を目的とした事業について
- 生涯学習全般について

#### (2) 人づくり、地域づくりを行っている他県の公民館等に、取組の紹介動画を作成依頼

- 広島県広島市文化財団古田公民館
- 高知県NPO砂浜美術館
- 千葉県四街道市政策推進課

### 5 県内市町村・熊本市公立公民館調査回収率

対 象	依頼市町村数	回収市町村数	回収率 (%)
市（教育委員会）	14	14	100
町（教育委員会）	23	23	100
村（教育委員会）	8	8	100
熊本市公立公民館	19	19	100
全 体	64	64	100

## 第2章 市町村の生涯学習事業の現状

市町村の生涯学習に関する現状を把握するために、住民を対象とした講座内容や講座の実施回数、講座終了後の評価等について県内各市町村へアンケート調査を実施した。調査結果の概要は以下のとおりである。(数字は単位記載のものを除き市町村数)

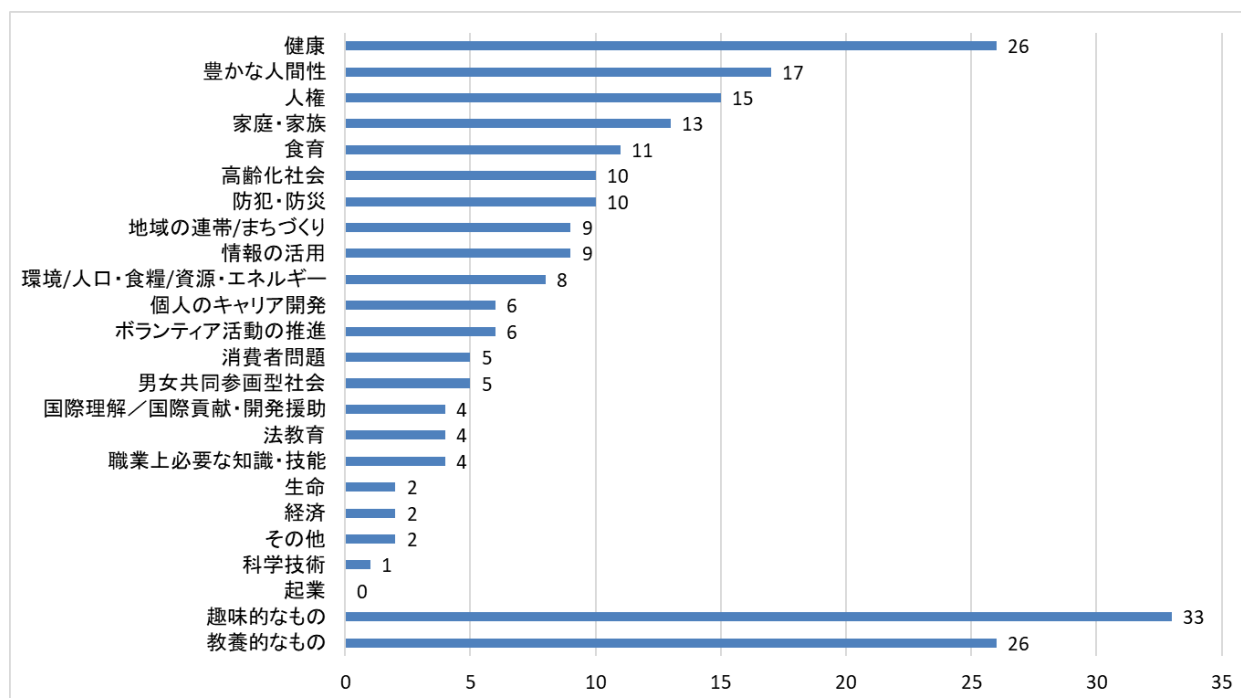
問1 本年度、貴市町村の教育委員会（公民館等も含む）主催で、生涯学習に関する講座や講演会を実施しましたか。（予定も含む）

【表1：各市町村における講座の実施の有無】

	H30	H31(令和元)	令和2
実施した	45	45	36
実施していない	0	0	9

本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大や7月豪雨災害の影響から、講座等の中止を余儀なくされた市町村もあった。

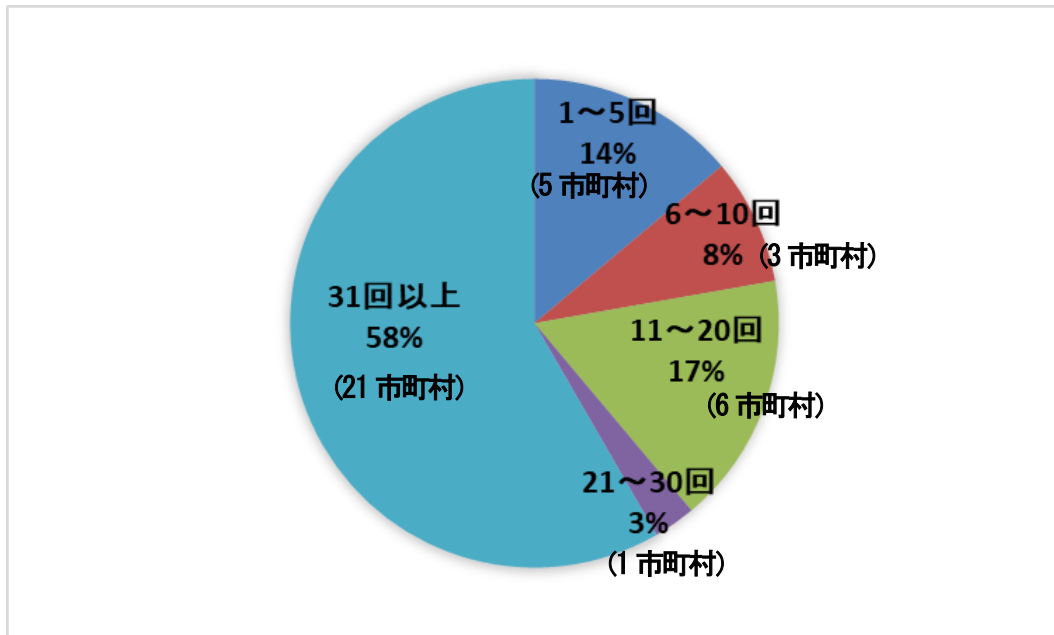
問2（1）本年度実施した（予定）講座や講演会の学習領域に○印をつけてください。〔複数回答可〕



学習領域は、「健康」が一番多く、次いで「豊かな人間性」「人権」「家庭・家族」「食育」の順である。「健康」は、約7割の市町村で実施されている。昨年度、8位であった「豊かな人間性」が2位に上昇している。

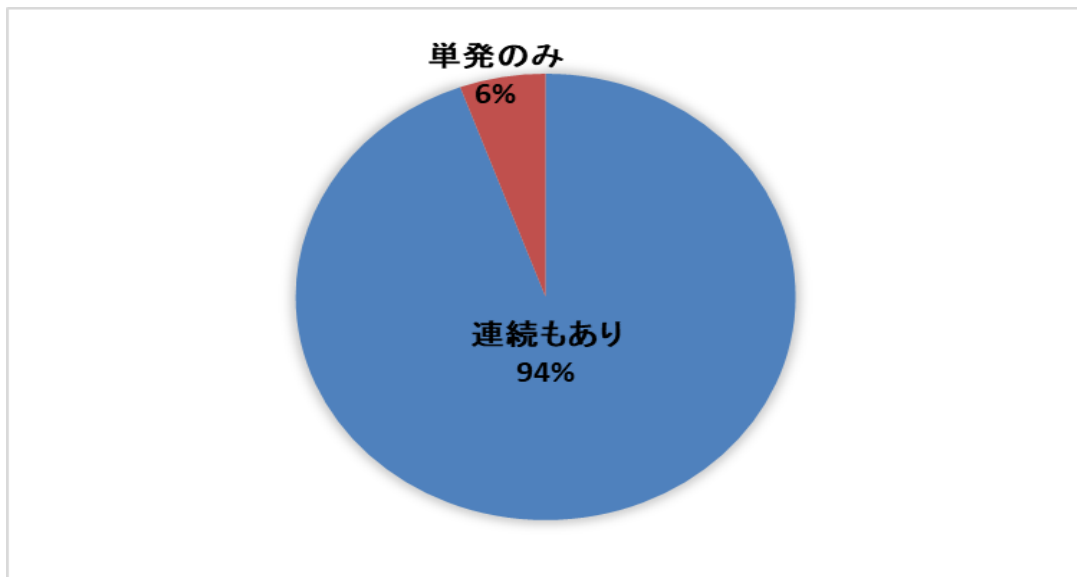
その他の領域としては、学校教育の支援のための講座が実施されている。

(2) (1) の講座等の合計実施回数を選んでください。(予定も含む)



年間実施回数は、「31回以上」が21市町村(58%)と一番多く、次いで「11~20回」、「1回~5回」、「6~10回」、「21回~30回」の順である。昨年度と比べると「6~10回」は6ポイント増、「31回以上」は同ポイント、「21回~30回」と「11~20回」はそれぞれ1ポイント減、「1回~5回」は4ポイント減である。

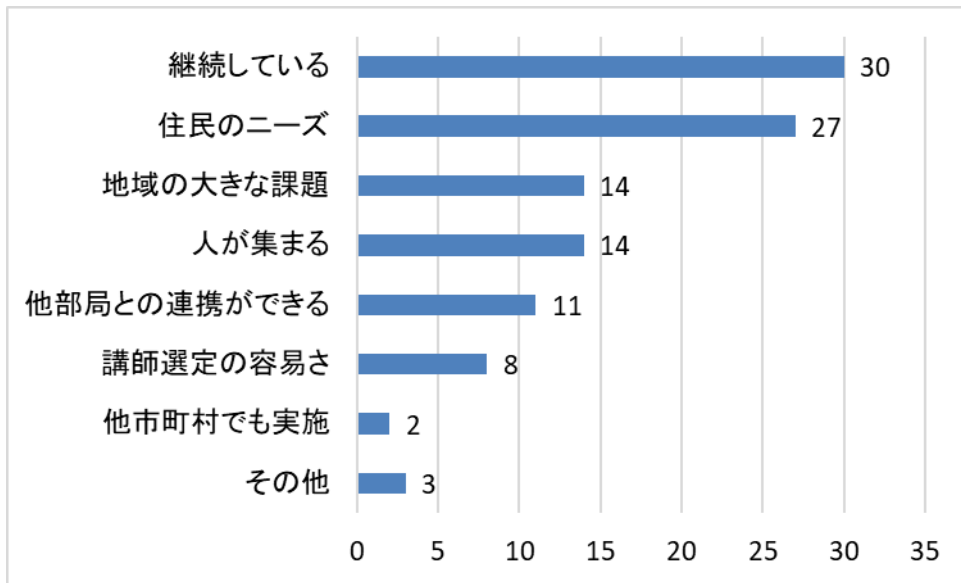
(3) (1) の講座等の実施形態について、当てはまるものを選んでください。



実施形態は、「連続した講座」が34市町村(94%)、「単発のみの講座」が2市町村(6%)である。昨年度と比較すると、連続した講座を実施している市町村の割合が、10ポイント増加している。

(2市町村)

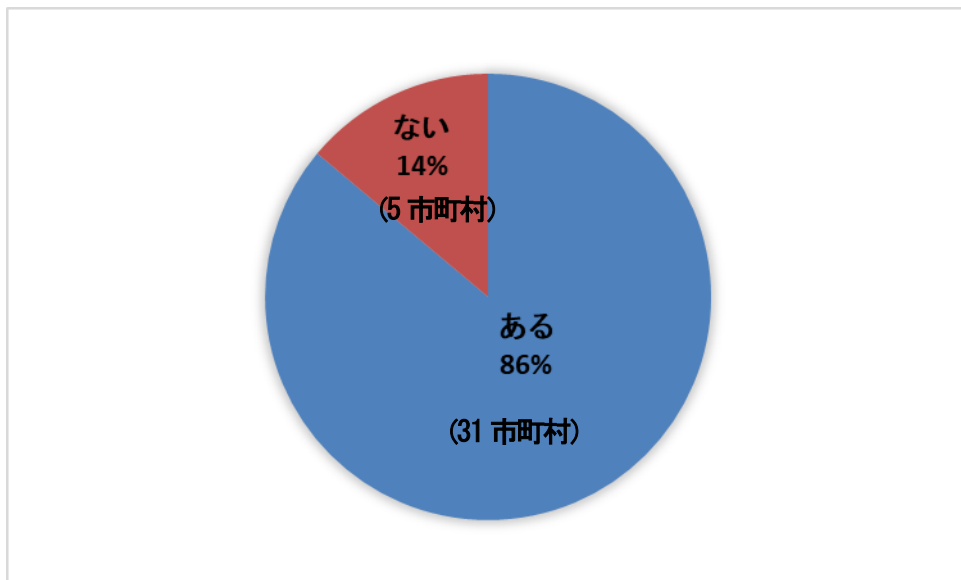
(4) (1) の講座等の学習領域を選んだ理由は何ですか。〔複数回答可〕



学習領域選定の理由は、「継続しているから」「住民のニーズが高いから」「地域の大きな課題だから」「人が集まるから」の順である。「新規の受講者の獲得」に向けた事業展開を行っている市町村もある。

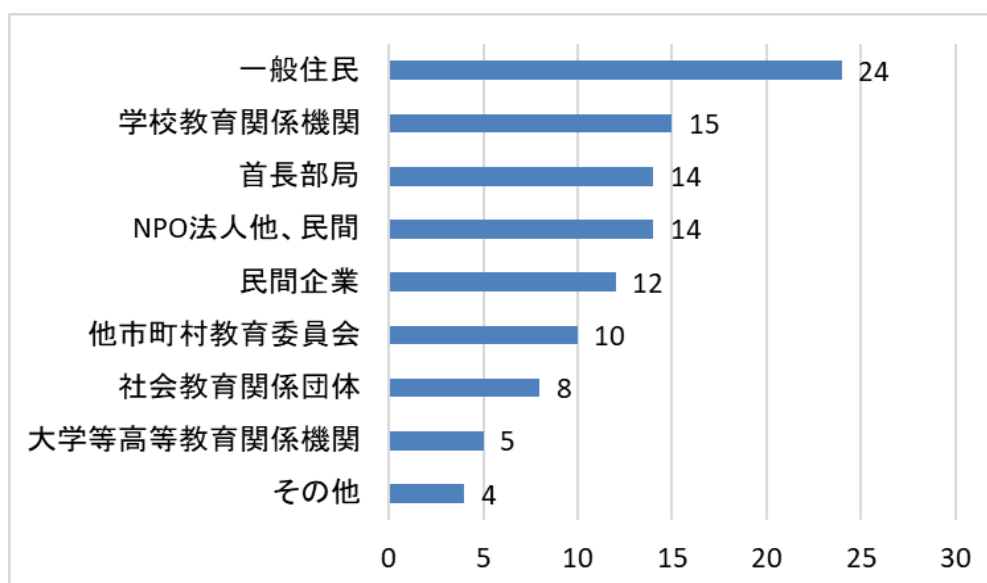
その他の理由としては、学校のニーズに応じて領域を設定している市町村もある。

(5) (1) の講座を実施するにあたり、連携・協力した個人・機関（構成員を含む）がありますか。



「連携・協力」を行った市町村は、31市町村（86%）であった。昨年度比で2ポイント上昇した。連携・協力を進めている市町村が増えていることがわかる。

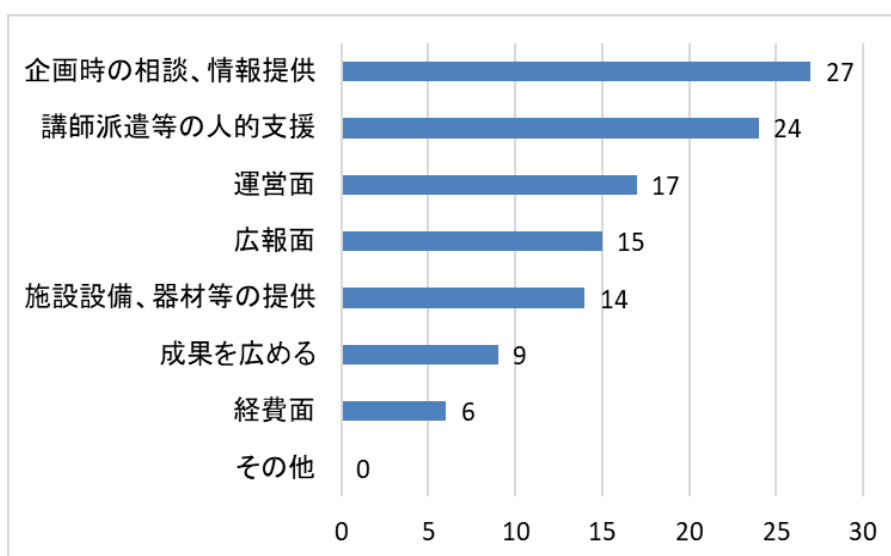
また、連携先は、どのような機関ですか。〔複数回答可〕



講座実施の連携先としては、「一般住民」、「学校教育関係機関」「首長部局」「NPO法人他、民間」が上位である。昨年度は、5位であった「学校教育関係機関」が2位に上昇している。多くの機関と連携、協力している講座が実施されていることがわかる。

その他の連携先としては、「親の学び」プログラムトレーナーや県教育委員会、県警などが挙げられている。

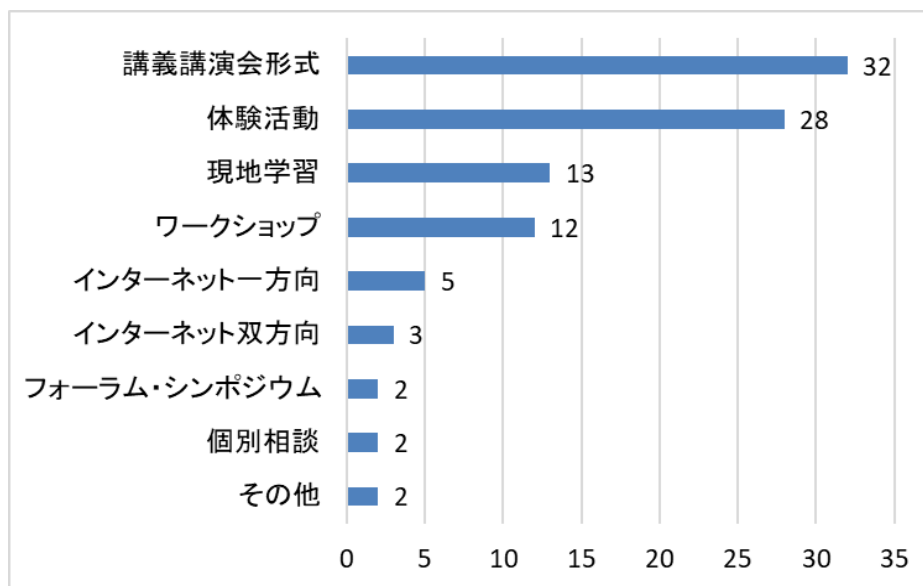
(6) (5) の機関とは、どのような内容や場面で連携・協力しましたか。〔複数回答可〕



連携内容や場面については、「企画時の相談、情報提供」「講師派遣等の人的支援」「運営面」が上位である。企画の段階から関係機関と連携している市町村が多いことがわかる。



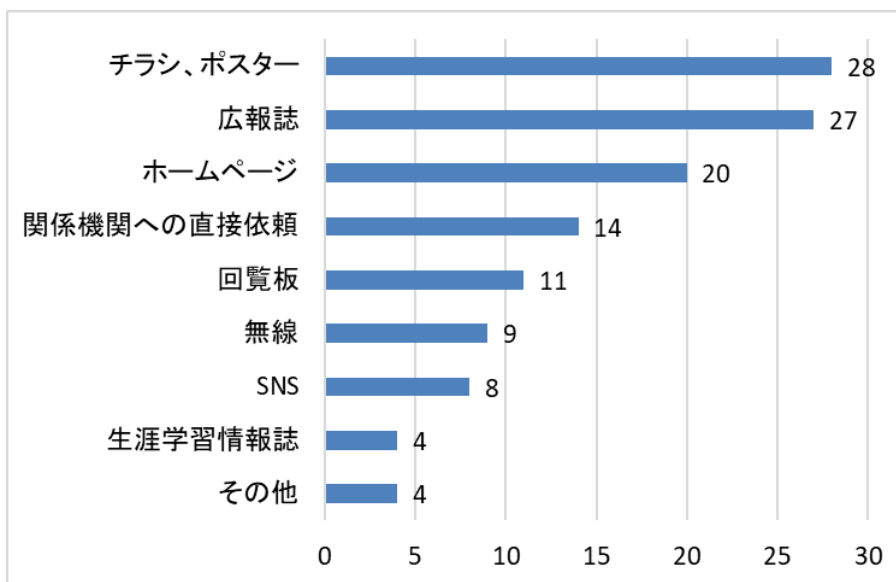
(7) (1) の講座等はどのような学習形態でしたか。〔複数回答可〕



学習形態は、「講義・講演会形式」が最も多い。昨年度と比較すると、「現地学習」が半減したが、「インターネット」の活用が新規で増えている。

その他としては、ケーブルテレビによる講話などが挙げられている。

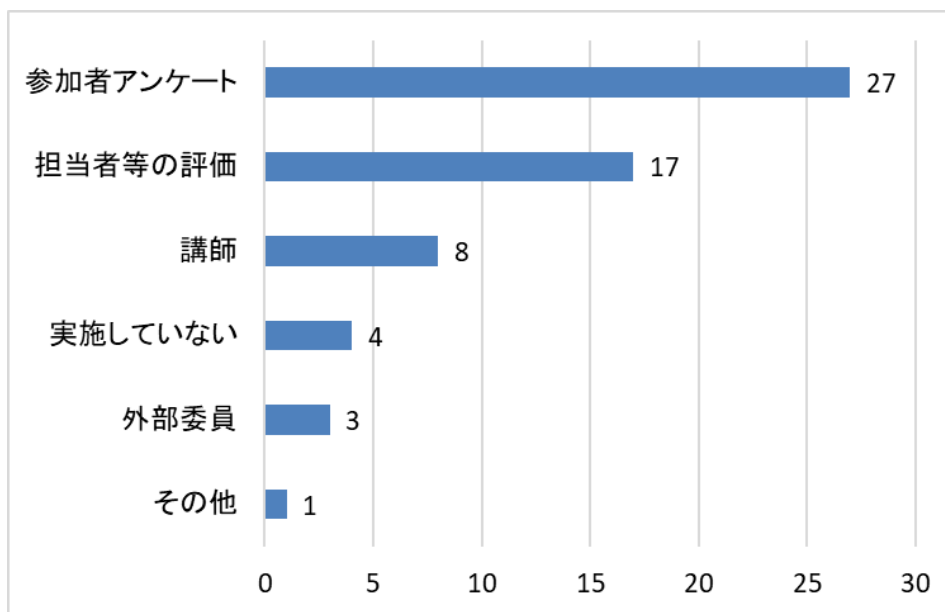
(8) 広報はどのような手段で行っていますか。〔複数回答可〕



講座の広報手段は、「チラシ、ポスター配布」「広報誌掲載」「ホームページ掲載」「関係機関への直接依頼」が多い。今後、紙媒体だけではなく、SNSの活用等、受講生の年代を考慮して広報の手段を工夫していく必要がある。

その他の方法としては、町内放送やデタポン（民放テレビ局による住民情報サービス）、パンフレットの活用などである。

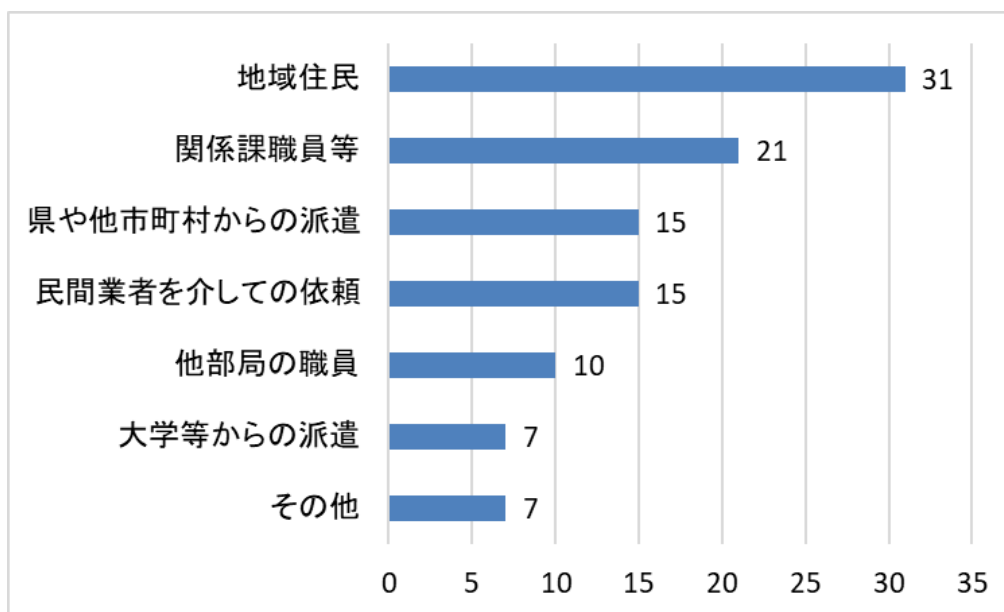
(9) 講座評価をどのように行っていますか。〔複数回答可〕



講座の評価方法については、昨年同様、「アンケート」による評価が最も多い。また、複数の方法で講座評価を実施する市町村が多い。

その他としては、中学生のレポートを活用している市町村もある。

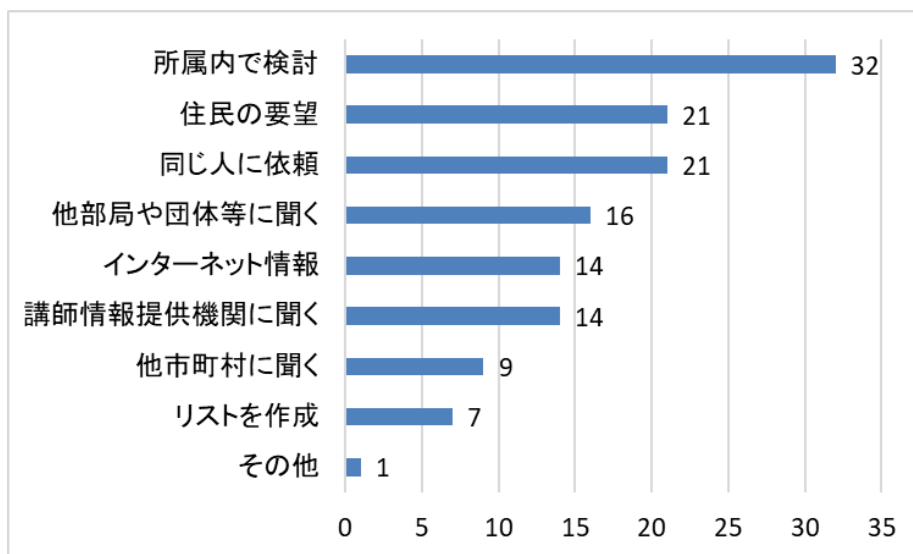
(10) どのような人が講師を務めましたか。〔複数回答可〕



講座を務めた講師は、「地域住民」「関係課職員等」「県や他市町村からの派遣」「民間業者を介しての依頼」の順である。昨年度2位の「民間業者を介しての依頼」が減少している。

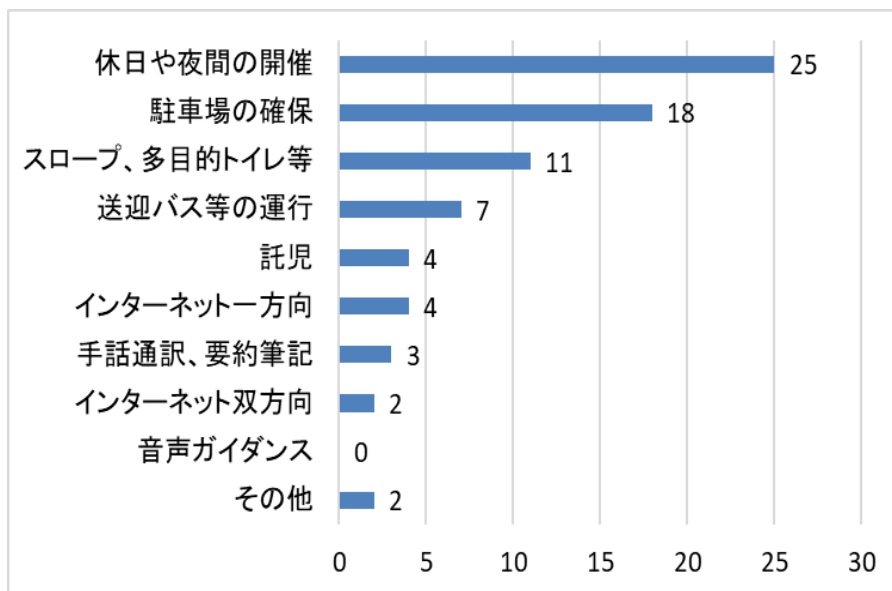
その他としては、生涯学習指導者名簿登録者やNPO法人、親の学びプログラムトレーナーなどがあり、多様な連携が図られている。

(11) 講師情報をどのように得ていますか。〔複数回答可〕



講師の情報源は、「所属内で検討」が最も多い。昨年度5位であった「住民の要望」が増加している。住民のニーズに応じた講座運営が行われていることがわかる。一方、「他部局や団体等に聞く」が2位から4位へと11市町村の減少が見られる。部局の枠を超えた連携が課題である。

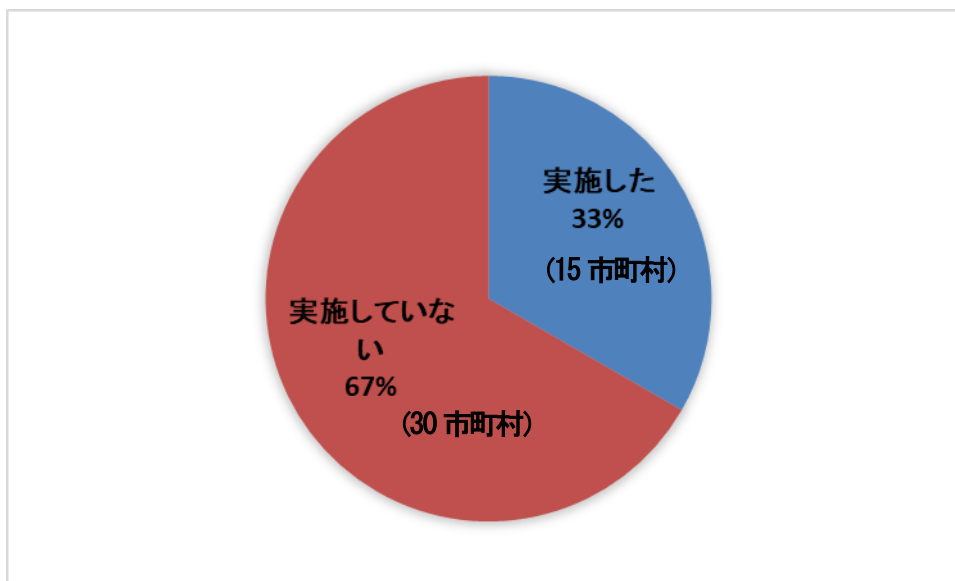
(12) 住民が参加しやすいように、どのような支援を行っていますか。〔複数回答可〕



住民が参加しやすいように、「休日や夜間の開催」「駐車場の確保」「スロープ、多目的トイレ等」「送迎バス等の運行」「託児」「手話通訳、要約筆記」などの支援が行われている。昨年度までは支援策に含まれていなかった、「インターネット」を活用した講座運営が特徴的である。

その他としては、市運行のバス時刻表に合わせた開催時間の設定やケーブルテレビによる放送などの工夫が行われている。

問3 学習成果活用を視野に入れた講座（人材育成や仲間づくり、仕組みづくり等）を実施しましたか。（予定も含む）



学習成果活用を視野に入れた講座を「実施した」市町村の割合は、15市町村（33%）である。昨年度と比較すると4ポイント増加している。少しずつではあるが、学習成果活用を視野に入れた講座を実施している市町村が増えてきている。

次の表に示すのは、学習成果活用を視野に入れた講座の具体例である。（回答があった市町村及び熊本市公民館のみを示す。）

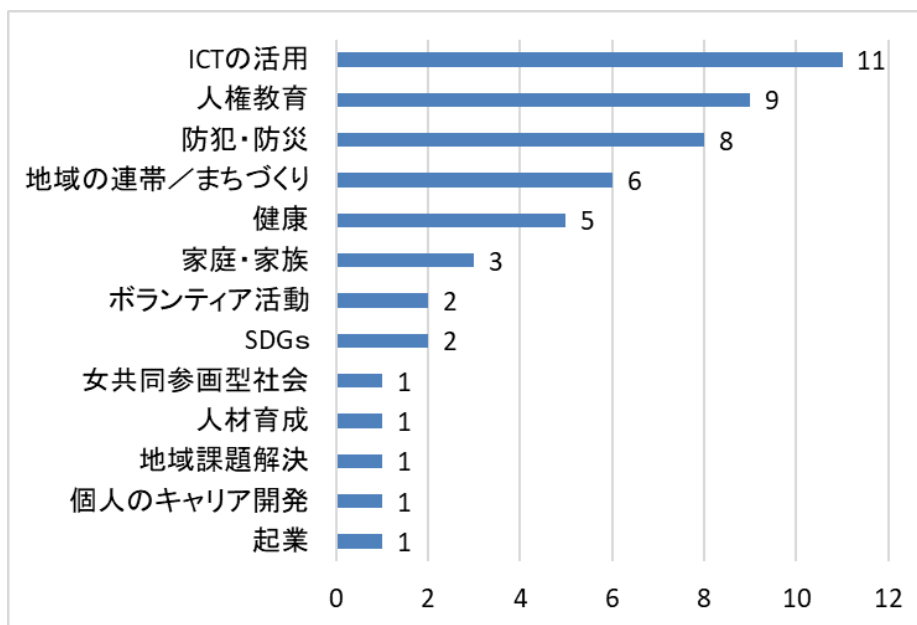
市町村等	講座名	内 容
八代市	全講座	講座中に仲間づくりを実施。
	地域の人づくり講座	県と共催する地域学校協働活動推進員等の育成講座。1／3年目。
荒尾市	地域の人づくり講座	県と共催する地域学校協働活動推進員等の育成講座。1／3年目。
玉名市	地域の人づくり講座	県と共催する地域学校協働活動推進員等の育成講座。1／3年目。
天草市	パソコン講座	パソコンの技能を学ぶ講座。
山鹿市	図書館ボランティア養成講座	図書館ボランティアについて基礎から内容を学習し、実働につなぐ。
菊池市	くまもと「親の学び」進行役養成講座	くまもと「親の学び」プログラムを活用した進行役を養成する講座。
	地域の人づくり講座	県と共催する地域で活動できる防災士リーダーを育成する講座。今年度は2／3年目。
	旭志2020手話教室	優しいまちづくりを目指し、日常使える手話を学ぶ講座。

	心と心をつなぐ、ボランティア活動	ボランティアの実践家の話を聞き、ボランティア活動につなげる。
宇土市	ボランティア養成講座	地域学校協働活動推進事業のボランティア養成講座。
宇城市	地域の人づくり講座	県と共催する公民館祭りを通したまちのリーダーを育成する講座。2/3年目。
合志市	くまもと「親の学び」指導者養成講座	くまもと「親の学び」プログラムを活用できるトレーナー養成講座
美里町	おもてなしの英会話講座	縁がわカフェやフットパス利用者のおもてなし法を学ぶ講座。
長洲町	地域の人づくり講座	公民館講座の講師としてのノウハウを学び、自主講座の開講につなぐ。2/3年目。
御船町	カルチャースクール	県内各地から講師を招き、年に17回程度の講座を5つ開催。
益城町	ふるさと学芸員	町の偉人「四賢婦人」について学び、修了者は「ふるさと学芸員」に登録及び「四賢婦人記念館案内人」として活動する。
津奈木	地域の人づくり講座	県と共催する公民館を通じた人材育成及び地域（まち）づくり。2/3年目。
中央公民館	コミュニケーションスキルアップ講座	良好な関係を築くために、コミュニケーションスキルを学ぶ講座。
南部公民館	傾聴ボランティア養成講座	講座数の半分を市民企画講座として実施する講座。
東部公民館	かんたん！リフレッシュダンス	リフレッシュダンスについて学び、サークル活動につなげる。
託麻公民館	つながる Café in 託麻公民館	みなし仮設入居者や地域の誰もが参加できる定期的な集いの場。
	認知症サポーター養成講座	認知症を正しく理解し、支援できる人材を育成する講座。
幸田公民館	幸田家庭教育学級	地域の保護者同志が親睦を深めて、子育ての情報交換や悩みを共有する場。
清水公民館	パソコンで年賀状作り	講師と受講者ともに地域住民の講座。人材育成や地域の仲間づくりを目指す。

大江公民館	LINE講座	地域の自治会役員を対象に実施するLINEの活用講座。地域の防災意識の養成にもつなぐ。
花園公民館	ウクレレミーティング	ウクレレの練習に取り組み、発表会やボランティア活動につなぐ。
北部公民館	おしゃべり窓ふき隊	異年齢集団による地域の福祉施設訪問などの体験活動を実施。郷土愛などを育む。
飽田公民館	Zoom活用講座	地域の読み聞かせ団体メンバーを対象にZoom操作の基本講座を実施し、実働につなぐ。
河内公民館	ペップトーク	より良好な人間関係を築くために、考え方・話し方を学び、日常化につなぐ講座。
城南公民館	楽しく学べる手話講座	手話の基礎を学び、手話ボランティアの活動や検定試験につなぐ。
植木公民館	植木の史跡・名所の歴史を学べ	植木の史跡・名所についての学習を通じて、案内ボランティアを養成する講座。

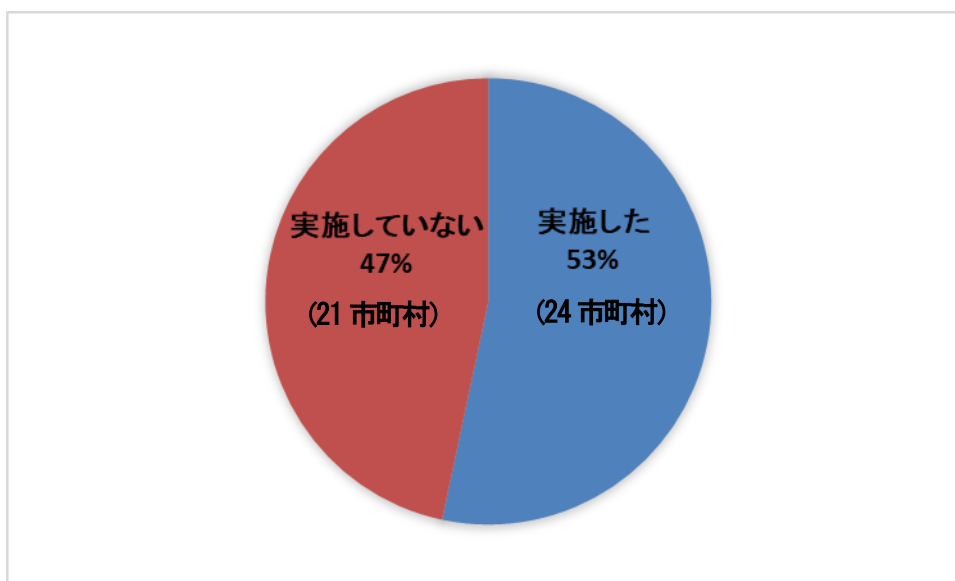
回答状況から、地域で活躍する人材育成やつながりづくりを視野に入れた講座を実施している市町村及び公民館が数多く見られた。

問4 今後、住民への提供が必要だと考えられる学習についてご記入ください。[自由記述]



昨年度の上位3位は、「地域の連帯やまちづくり」「ボランティア活動」「個人のキャリア開発」であったが、今年度は「ICTの活用」「人権教育」「防犯・防災」の順となっている。新型コロナウイルス感染症から生じる差別・偏見事象の防止や、自然災害から命を守る意識の高まりが窺える。

問5 本年度、子供を対象とした事業を何か実施しましたか。(予定も含む)



昨年度と比較すると、実施した市町村の割合が23ポイント減と大きく減少している。

次は、実施した市町村の事業例である。(回答があった市町村及び熊本市公民館のみを示す。)

市町村等	事業名	内容
八代市	布マスクづくり講座	夏の涼しい素材で布マスクを作る講座。
	カレンダー作り講座	葉っぱを使って絵を描き、周りを画材で自由に描いてオリジナルカレンダーを作る講座。
人吉市	草木山川学校	令和3年3月に自然環境を活用した野外体験活動。子供たちに良質な驚きと感動を引き起こし、「生きる力」と「郷土愛」を育む講座。
荒尾市	コズミックカレッジ	宇宙科学を題材とし、且つ身近な物で行う科学の実験。
	親子で遊ぼう！英会話教室	小学校低学年及び保護者を対象とした英会話教室。
	作って飛ばそう！紙飛行機	紙飛行機づくりを通して、飛行の原理を学ぶ講座。
水俣市	青少年育成市民会議小学生野外活動体験	野外でのパン作りとネイチャーゲームの体験。
玉名市	小学生のためのお金の授業～お年玉を目前に～	小学生に対して、お金の大切さや使い方についての講座。
天草市	青少年育成講座	小中学生を対象とした職業講話。
	社会科防災講座	小中学生を対象とした防災講座。
	親子ふれあい講座	小学生とその保護者を対象とした家庭教育講座。
菊池市	図書館コラボ	親子がボランティア団体による人形劇の世界を体験する講座。
宇土市	子供地域活動推進事業	市内7地区の公民館で青空教室を体験。

宇城市	ふれ愛学習会	差別をなくす行動のできる、差別に立ち向かうたくましい心を持つ子供の育成と仲間づくりの講座。
美里町	野外体験活動	火起こしや飯盒炊飯などを通して、マッチの使い方・薪のくべ方など災害時にも役に立つ知識を学ぶ講座。
長洲町	夏の星座観察会	「地域の人づくり講座」の受講生が、簡易プラネタリウムを使って夏の星座や実際の星の観察体験。
大津町	木育教室など6講座	木育教室:高校生を講師に、木育の大切さについて学習した後、体験活動(筆箱づくりなど)を行う講座。
菊陽町	ジュニアリーダー事業	美化作業ボランティアや子供会大会の運営補助など。
小国町	青少年健全育成活動の講座	近年、児童生徒における SNS での犯罪が多発しているのでインターネットの利便性や危険性について学ぶ講座。
産山村	産山村人権オンライン集会	例年、児童生徒等を対象に、人権作文の発表、人権メッセージの紹介、講演等の実施。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、すべてを動画配信で実施。
山都町	中学生・高校生人権講演会	中学、高校生を対象とした人権講演会。
氷川町	親子でキャンプ飯講座	親子を対象とし、キャンプ活動をテーマにダッチオーブンを使った料理、テント設営や火おこしなどを体験する講座。
津奈木町	つなぎ遊びの学校	町内の小学生を対象に、年間を通した様々な体験活動等を実施。
錦町	英会話教室	小中学生の希望者を対象に、ALTが英会話を教える教室。
湯前町	英会話教室	小学校5・6年生を対象に、夜間に1時間、ALTによる英会話教室。
水上村	奉仕・体験学習「ふるさと塾」	水上村の人づくりの一環として、子供たちの相互の連帯意識を深め、自立心を養いながら、将来を担う健全な青少年を育成するために、奉仕活動や体験活動を実施。
相良村	英会話教室	ゲーム等を通して英語を学ぶ教室。
	いけばな教室	生け花をいける教室。
五木村	夏休みのびのび子供教室	夏季休業期間中、児童の学校以外の活動拠点、健全育成、社会性向上を図るため、「学校・体験・交流・学び・遊び」をテーマとした子供教室。
中央公民館	科学工作ものづくり教室	いろいろな物を作る中で、物づくりの楽しさや面白さに触れる機会を提供する教室。
五福公民館	走り方教室	走力を高めるために、体の使い方や走る時のコツを練習する教室。
西部公民館	子ども硬筆	小学生を対象にしたかきかた教室。

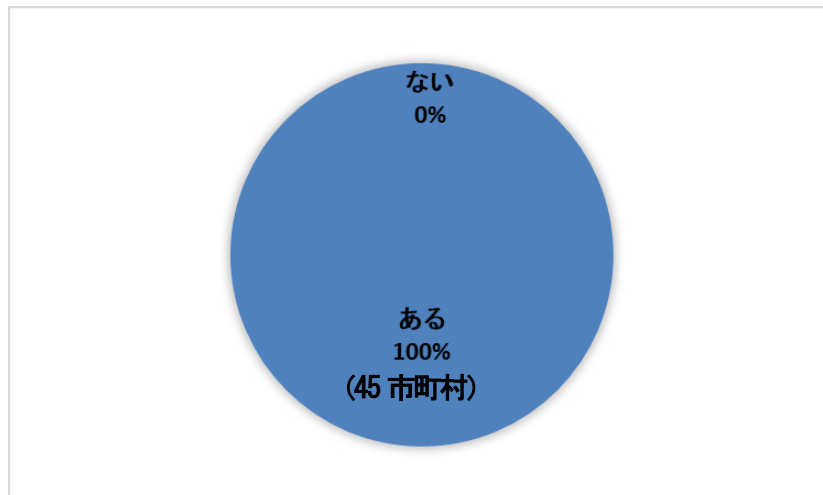


南部 公民館	親子でクリスマスケーキづくり	親子でクリスマスケーキを作る教室。
	初めてのキッズイングリッシュ	ネイティブ・イングリッシュに触れ、英語に親しむ教室。
	子どもいけばな・親子書道等	子どもいけばな・親子書道・キッズそろばん教室。
東部 公民館	やってみよう！トランポリン	いくつかの活動メニューから自分の興味・関心や技能に応じて、自分で活動内容を選択する「セレクトメニュー」づくりを導入し、運動の楽しさに触れる体験。
龍田 公民館	メリー楽器ソクリマス	身近な材料を使用して楽器を作り、合奏する体験。
託麻 公民館	熊大メイクフレンズとの連携講座	大学生の企画による子ども向けの講座。
	おはなしの部屋	読み聞かせボランティアグループ「たくま読書とおはなしの会」による楽しいお話会。
	親子パン作り	親子でパンを作る教室。
	小学生のための生け花教室	小学生対象の生け花入門編。
	親子で作る米粉ピッツア	県産米粉に小麦粉を加えたピッツアを親子で作る教室。
	あいうえおかたづけ！	親子で片付けについて学ぶ教室。
秋津 公民館	熊本大学メイクフレンズ連携企画	小学生対象コミュニケーションをテーマにしたウォークラリーの体験。
	和風作り	親子で和風作りをする教室。
	小学生書き方教室	小学生を対象とした書き方教室(硬筆・毛筆)
清水 公民館	ぴよぴよあそびクラブ・清水キッズ体験隊	今年度は中止になったが、大学生が主となって、幼児、小学生と活動を通して、大学生の意識・指導力向上、子どもたちが楽しく成長する講座。
大江 公民館	ダンス	小学生を対象にした8回コースのダンス講座。
花園 公民館	こども生け花	お花の生け方を学び、生活の中で自然を愛する態度を培う教室。
北部 公民館	ほくぶキッズ遊学塾	北部公民館エリアの小学3年生～6年生21人と10月から月1回のペースで、地域のボランティア団体「ほくぶ高校生ボランティアサークルわいわいHVC」を講師に迎え、「ふれあいクリスマス交流会」や「小萩園でMy 凧あげ」など地域に根差した活動の実施。

飽田 公民館	南区子どもチャレンジ公民館講座	自然体験・環境学習・秋の収穫体験(芋掘り・ナス収穫)・クリスマスリースづくり・山登り体験。
	Jr ダンス講座等	ダンス・鉄棒跳び箱教室。
河内 公民館	キッズトランポリン	トランポリン体験。
	凧作りと凧揚げ	凧を作って揚げる体験。
天明 公民館	そろばん等	そろばんの基本的な使い方、英会話の基本、簡易のプログラミング製作。
富合 公民館	キッズトランポリン等	トランポリン、硬筆、日本舞踊、ダンス教室。
城南 公民館	親子で学ぼう世界の国	アフリカの生活や自然、人を題材にしたカルタ(アフリカルタ)を使い、遊びの中からアフリカのことについて学び、国際理解を深める講座。
植木 公民館	絵・習字等	夏休みの課題(絵・習字)の作成、生け花体験、ARプラネタリウム体験、プログラミング体験、トランポリン体験、体操教室、走り方教室。

それぞれの地域にある資源や人材を活用しながら講座が企画されている。事業としては、ものづくりや屋外での体験活動、語学教室、ICT教室など、五感を使いながら世代間交流を図ったり、親子のふれあいを深めたりする内容が多く、子供の成長を地域全体で見守る様子が窺える。

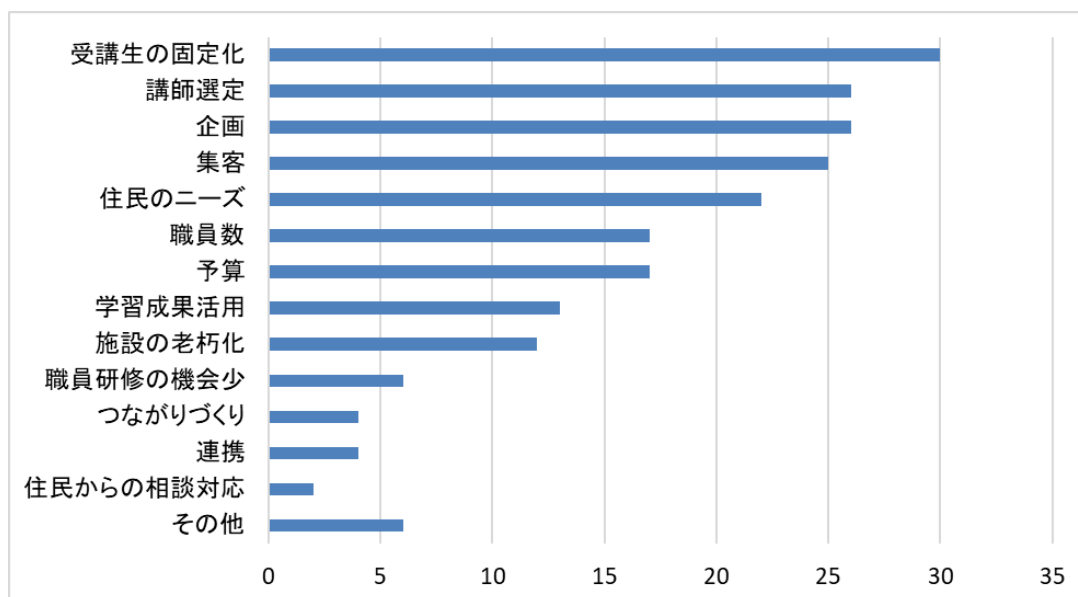
問6 生涯学習を行う上での課題や悩みはありますか。



全市町村が課題や悩みを持ちながら、生涯学習を推進している状況がわかる。

問7 問6で「ある」と答えた方にお聞きします。課題や悩みの内容を教えてください。

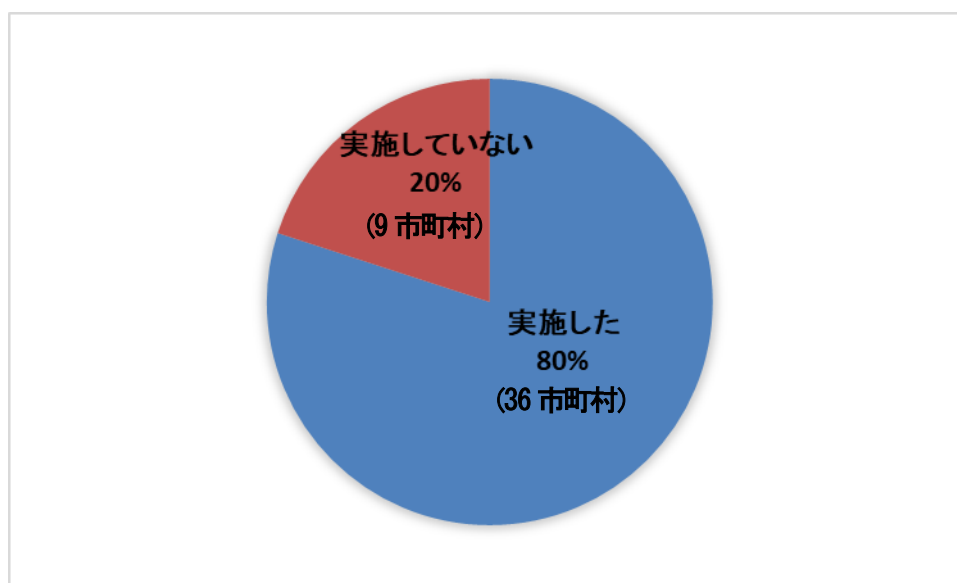
[複数回答可]



生涯学習を行う上で、「受講生の固定化」「講師選定」「企画」「集客」について課題を抱えている市町村が多い。住民のニーズを把握し新たな講座企画にチャレンジするなど、新しい受講生の獲得につなげていく必要がある。

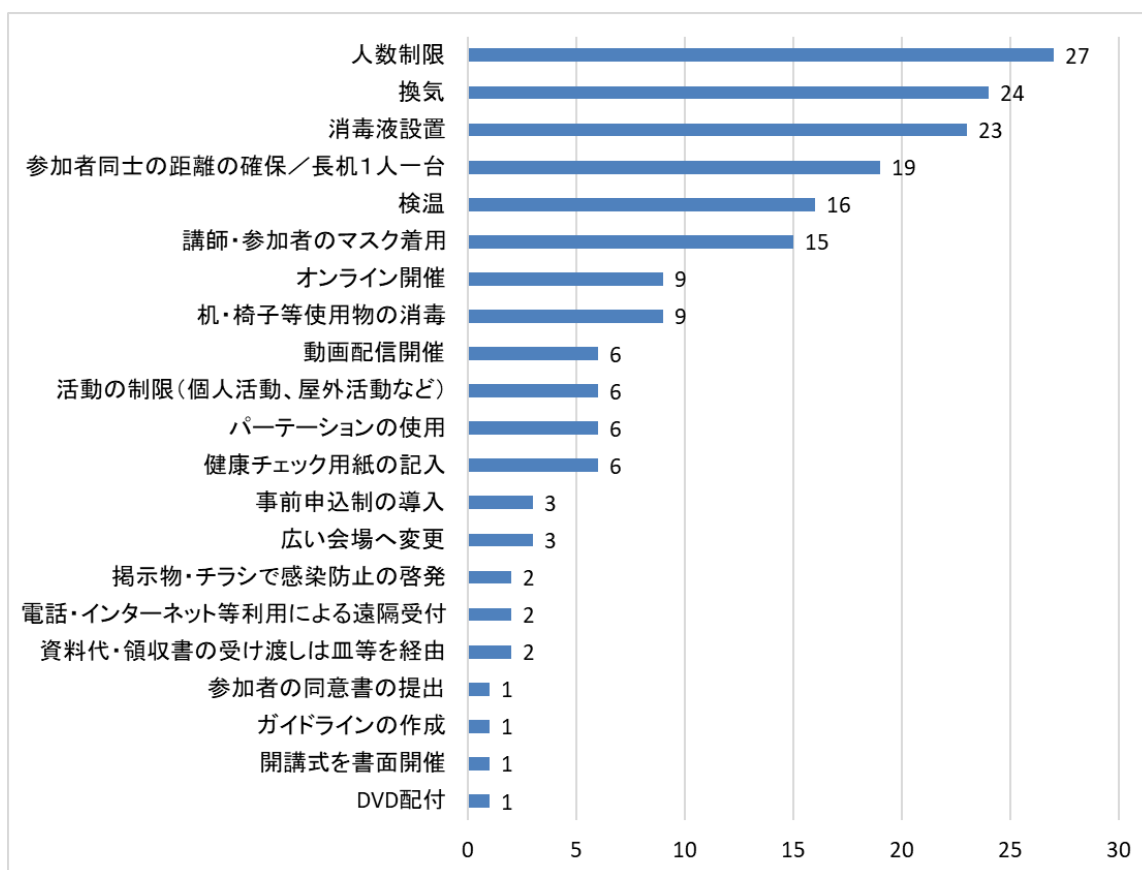
その他としては、新型コロナウイルス感染症拡大や自然災害の影響から、講座開催の難しさを課題だと捉えている市町村もある。

問8 新型コロナウイルス感染症の拡大防止に向け、事業の開催や運営方法等で、工夫や新たな取組を実施しましたか。



事業の開催や運営方法等で工夫や新たな取組を実施した市町村の割合は、8割である。

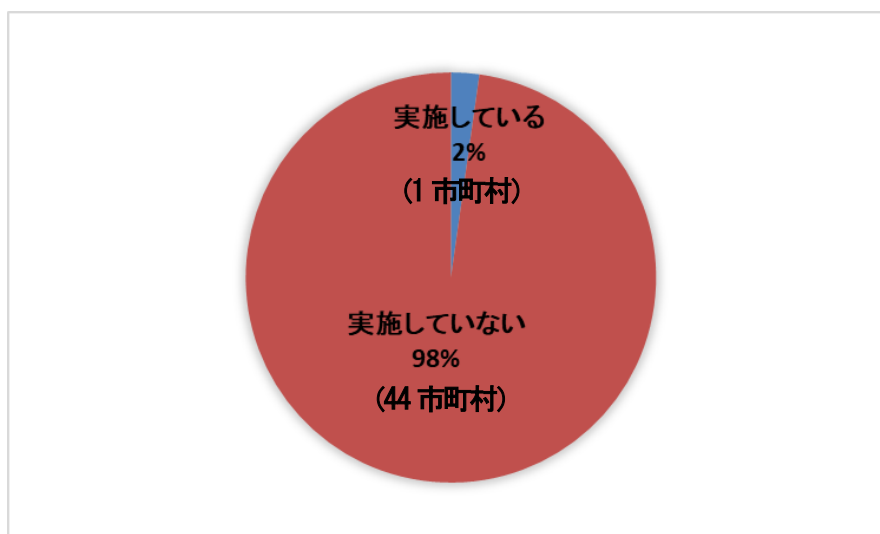
次は、実施した市町村の取組例である。(回答があった市町村及び熊本市公民館のみを示す。)



大部分の市町村において「人数制限」「換気」「参加者同士の距離の確保」の3密対策が実施されていることがわかる。

一方実施していないと回答した市町村の理由は、事業の中止や施設の利用ができないなどである。

問9 (1) 社会教育指導員に対する研修を実施していますか。



社会教育指導員を対象とした研修を実施している市町村数は、1市町村で、年2回実施である。

### 第3章 県と市町村の連携事業

#### 1節「地域の人づくり講座」2年次経過報告

【事例1】公民館を中心に活動する人材を育成することを目的とした講座（長洲町）

#### 1 1年次の計画

地 域 課 題
○住民の社会参加が不足している ○人材バンク（総務課作成）があるが、機能していない。



全 体 目 標
地域で講師として活動できる人材を発掘、養成し、中央公民館の自主企画講座及び自治公民館での活動を活性化させる。



講 座 企 画			
テーマ	伝えたいことをカタチにする～公民館で講師デビュー!?!～		
講座目標	昨年度のサテライト教室を踏まえ、講座の講師としての基本的なスキルを学び、公民館の講座につなげる。		
方法	○人材バンク登録者を中心に募集をかける。 ○夜間講座として実施する。		
回数	演題・内容	講師	
1	演題	楽しい参加体験型講座の作り方 ～活動が満足度アップにつながる～	内閣府地域活性化伝道師 三角 幸三
	内容	参加体験型講座の基本的な構成、進め方等を学ぶ。	
2	演題	行ってみたくなる講座の見せ方 ～企画から広報までのノウハウ～	株式会社 談 プランナー 甲斐 由貴
	内容	ニーズのつかみ、自分の趣味や特技と絡めて企画、広報までのノウハウを学ぶ。	
3	演題	想いが伝わる講師のマナー ～意外と見られている講師の立ち居振る舞い～	コミュニケーションセンター 代表 林田 美恵子
	内容	講師としての基本的なスキル（非言語の部分）を学ぶ。	
4	演題	想いが伝わる話し方 ～分かりやすく、心地よい発声スキル～	コミュニケーションセンター 代表 林田 美恵子
	内容	講師としての基本的なスキル（言語の部分）を学ぶ。	
公民館フェスタ			
5	演題	講師デビューに向けて ～公民館まつりの振り返り～	内閣府地域活性化伝道師 三角 幸三
	内容	公民館祭りを振り返り、成果と課題を整理し、今後の講師としての活動に生かす。	

## 2 2年次の計画

講座企画		
テーマ	あなたの趣味や得意を地域に還元！～公民館で講師デビュー～	
講座目標	講座の講師としてのスキルを学び、公民館活動等の地域活動につなげる素地を養う。	
方法	○趣味や特技を生かして活動したい人を中心に募集をかける。 ○夜間講座として実施する。	
回数	演題・内容	講師
1	演題	楽しい「公民館フェスタ」をつくる ～「参加する」から「企画する」へ～
	内容	講師や参加者から昨年度の公民館フェスタの感想（楽しかった点・反省点・改善点等）をもらい、今年度の方向性を確認する。
2	演題	あなたの企画書診断① ～人が集まる・人が喜ぶ企画へステップアップ～
	内容	事前に作成した企画書を基に、実施予定の講座内容をプレゼンする。講師や受講生から意見をもらい、磨き上げる。
3	演題	あなたの企画書診断② ～参加者の満足度を上げる手法を学ぶ～
	内容	練り直した企画書をもとに、模擬講座を行う。講師や受講生から意見をもらい、磨き上げる。
4	演題	第3回公民館フェスタに向けて
	内容	公民館フェスタに向けて、準備品等の確認や当日の段取り共通理解する。
公民館フェスタ		
5	演題	講師デビューに向けて ～公民館フェスタの振り返り～
	内容	公民館祭りを振り返り、成果と課題を整理し、公民館講座や自主講座へとつなげる。

内閣府地域活性化伝道師  
三角 幸三

内閣府地域活性化伝道師  
三角 幸三



2年次の成果と課題を踏まえ、3年時の計画を立て、地域活動の定着を目指す。学び直しとして、フォローアップ研修や先輩講師の体験談等を聞く機会を設定する。

### 3 2年目の講座の実際

#### 【第1回】

公民館フェスタをゴールに位置付けて、一人一人が現段階で考えている企画について発表していった。昨年度参加した人は、その経験で得たものや課題を踏まえながら考えたり、SDGsの視点を取り入れながら考えたりすることができた。

#### 【第2回】

第1回の講座を受けて、各自が考えてきた企画の紹介を行った。説明後に、講師から企画を充実したものにするための具体的なアドバイスをもらった。受講生は、これから準備していくことや工夫していくことを明確にすることができた。

#### 【第3回】

一人一人が、各自の講座内容を詳しく説明していく中で、ブースの配置や時間設定、参加者の人数や年齢層、参加費用等についても明確にしていった。受講生がお互いにアドバイスをし合う場面もあり、受講生同士のつながりも強まった。

#### 【第4回】

長洲町担当者と受講生で、公民館フェスタのチラシ、前日準備、当日の日程等について、最終確認を行った。受講生が、より多くの来場者に来てもらうことを目的として意見を出し合うことで、公民館フェスタへの意欲が高まった。

#### 【公民館フェスタ】

受講生が講師となって9講座を実施した。それぞれのブースの展示の仕方や進め方を工夫して行うことで、来客者が楽しく活動することができていた。来客者数も昨年度よりも増え、受講生も講師として生き生きと活動していた。

#### 【第5回】

公民館フェスタの成果とともに、改善点を共有した。受講生が実践して気付いた課題をもとに、「次は、こうしたい」と意欲的に話す姿が多く見られた。

### 4 2年目の成果と課題

#### 【成果】

公民館フェスタという実践の場が設定されていたことで、受講生が受け身ではなく、自分たちで講座を工夫し、フェスタを盛り上げようという姿勢を生み出すことができた。長洲町のスタッフの方々の協力、細やかな配慮のおかげで、充実した講座となった。

#### 【課題】

公民館フェスタは、午前の部、午後の部で来場者数に大きな差があった。時間設定を工夫する必要がある。

### 5 2年目以降の展開

今年度の受講生の更なるスキルアップと自主的な活動につながるような講座内容の検討、新規受講生が集まるよう啓発を行っていく。



講座企画のポイントを学ぶ受講生



具体的なアドバイスを受ける受講生



作品を見せ、内容を説明する受講生



当日の流れについて話し合う受講生



公民館フェスタ当日の様子

【事例2】地域防災のリーダーとして活動する人材を育成することを目的とした講座（菊池市）

1 1年次の計画

地 域 課 題
○市民全体の防災に関する意識が低下している。 ○防災士の資格を持っているが、各地域で防災リーダーとして、活動に繋がっていない。



全 体 目 標
防災士としてスキルアップを図り、平時における備えや防災意識の向上の取組と、災害時における地域防災の牽引役としての的確な判断と行動による地域住民の安心安全の確保。



講 座 企 画			
テーマ	<b>防災士のためのスキルアップ講座</b>		
講座目標	防災士としての学び直しと、活動に向け必要なスキルアップを図る		
方法	○菊池市内の防災士取得者に募集をかける。 ○第2回目は、防災士の専門性を高めるために、ニーズに応じた講座を事前に選択し、受講する。		
回数	演題・内容	講師	
1	演題	<b>今、必要な地域防災のあり方</b>	
	内容	ワークショップを通して防災士としての悩みや地域防災の課題などについて把握する。	熊本大学大学院 准教授 竹内 裕希子
2	演題	<b>実践型講座でスキルアップ</b>	
	内容	3つの中から一つを選択し、ファシリテーターとしての専門性を高める。	
	①災害対応ゲーム クロスロード	②避難所運営ゲーム HUG（ハグ）	③災害図上訓練ゲーム DIG（ディグ）
	災害時の難しい判断が迫られる状況を体験することで、災害を自らの問題として考える。 【講師】 くまもとクロスロード研究会 代表 徳永 伸介	避難所で起こる様々な出来事を疑似体験し、判断しながら、スムーズな入所、適切な運営を考える。 【講師】 熊本大学大学院 准教授 竹内 裕希子	地図を囲み、皆で地域の情報を共有し、論議しながら、防災マップをつくり、災害対策を考える。 【講師】 菊池市総務部防災交通課 危機管理監 野村 浩司
3	演題	<b>求められる防災士としての活動</b>	
	内容	第1回・2回の内容を踏まえて、次年度の計画を立案する。	
			熊本大学大学院 准教授 竹内 裕希子



2 2年次の計画

講座企画			
テーマ	防災士のためのスキルアップ講座		
講座目標	地域防災力を強化する実践的スキルアップを図る。		
方法	○菊池市内の防災士（昨年度受講生）に募集をかける。 ○第3回～5回は、学校職員と連携し、「まち歩き」の実践を行う。		
回数	演題・内容	講師	
1	演題	防災とまちづくり ～西原村の奇跡～	西原村議会議員 堀田 直孝
	内容	熊本地震での教訓をもとに、住民共助による広域避難所の運営について学ぶ。	
2	演題	備えが当然のまちづくり ～いますぐできる防災術～	歌うママ防災士 柳原 志保
	内容	東日本大震災、熊本地震の経験をいかした、いますぐできる防災術を習得する。	
3	演題	学校と連携した地域防災力の強化①	熊本大学大学院 准教授 竹内 裕希子
	内容	隈府小学校区内の図上訓練&まち歩きを想定した関係機関とのワークショップを行う。	
4	演題	学校と連携した地域防災力の強化②	
	内容	隈府小学校区内の図上訓練&まち歩きの実践を通して経験を積む。	
5	演題	学校と連携した地域防災力の強化③	
	内容	図上訓練&まち歩き実践後の今後につなげる振り返りを行う。	



2年次の成果と課題を踏まえ、各地区での防災講座の企画と実施を目指す。

### 3 2年目の講座の実際

#### 【第1回】

講師が実際に経験された、平成28年熊本地震発生時の西原村での避難所運営に関する詳細について話をされた。「住民共助による避難所運営」が成功した背景には、地域コミュニティができ、地域住民の絆が確立していたことを知り、地域住民との日常的な関わりやつながりづくりが大切であることを学ぶことができた。

#### 【第2回】

講師が防災士となるきっかけとなった東日本大震災や熊本地震の体験を交え、具体的な備えについて学んだ。避難所をより良くするには、トイレ、キッチン、ベッドが最優先であるとの話から、実際に簡易トイレやベッドのつくり方やビニールパックを使った料理の実演があり、実践的な内容であった。

#### 【第3回】

「まち歩き」や「地図の作成」についての目的や方法について、地震や水害、子供の動線など、複数の視点からポイントを学ぶことができた。講義の後半では、次回の実践に向けて地区ごとに複数のグループに分かれ、「まち歩き」の具体的な計画を立てた。地域の小学校職員も参加し、積極的なグループワークが行われた。

#### 【第4回】

前回立てた計画をもとに、6グループに分かれて「まち歩き」の実践を行った。グループのメンバーは、防災士、地域住民（区長、公民館長）、教職員、行政職員、学生等で構成したため、それぞれの視点からの気づきや発見があり、普段では気づかないことも多く、学びの多い実践となった。

#### 【第5回】

「まち歩き」の結果の報告会を行った。「まち歩き」をする前と後で変わったこと、今ある安全をどう継続するか、発見したリスクをどう回避・改善するかなど、具体的な内容について議論が行われ、参加者の地域防災にかける思いや熱意が強く感じられた。

防災とまちづくりをあわせて進めていくことも学ぶことができた。

### 4 2年目の成果と課題

#### 【成果】

地域防災に関して、実際に経験したり、具体的な知識を習得したりすることで、防災意識の向上とともに実践的スキルアップを図ることができた。

#### 【課題】

防災士同士の横のつながりが不十分であるため、「情報交換会」を実施して防災士同士のネットワークを確立していく必要がある。（第1回目の自主勉強会を令和3年2月20日に開催）

### 5 2年目以降の展開

今後も「自主企画講座」や「情報交換会」を継続して行い、防災士同士のネットワークの確立を目指すとともに、各地区での防災講座の企画と実施を目指す。



避難所運営について学ぶ受講生



防災術について学ぶ受講生



「まち歩き」の計画を立てる受講生



「まち歩き」の実践を行う受講生



これまでの学びを発表する受講生

【事例3】地域リーダーの育成を目的とした講座（宇城市）

1 1年次の計画

地 域 課 題
公民館5館が防災拠点センターになると、「集い・学び・つながる」という公民館的機能が大きく低下する可能性がある。



全 体 目 標
<ul style="list-style-type: none"> <li>・公民館祭りの実施に向けた取組を通して、まちづくりに関わる人材育成を行う。</li> <li>・まちづくりに向けた地域活動が継続するような仕組みを整える。</li> </ul>



講 座 企 画		
テーマ	<b>わがまちを元気にしたい人 大集合！！</b> ～元気な「まちづくり」をスタート！～	
講座目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の強みを生かしたまちづくり、防災・減災に向けたまちづくり等を学ぶ。</li> <li>・公民館祭りに向け、地域や受講生の趣味や特技を生かした取組を考え、必要なスキルや態度を学ぶ。</li> </ul>	
方法	○5回の夜間講座を実施し、地域のリーダーに求められる事柄を講演やワークショップを通して学ぶ。 ○5回の講座後、公民館祭りの開催に向けて、地域リーダーを中心に準備を行う。	
回数	演題・内容	講師
1	演題	<b>ウキウキ宇城市の未来会議</b> ～my総合計画をつくろう～
	内容	宇城市をより良くするための意見を出し合い、参加者同士の交流を図る。
2	演題	<b>大災害！その時あなたならどうする？</b> ～災害に強いまちづくりとは…～
	内容	熊本県版クロスロードの体験を通して、防災・減災の視点からまちづくりを考える。
3	演題	<b>話し合いが楽しくなる！！</b> ～思いを引き出す司会術（ファシリテーションの手法）～
	内容	住民同士の話し合いを円滑に進めることができファシリテーションスキルについて学ぶ。
4	演題	<b>あなたのまちの“強み”は？“弱み”は？</b> ～地域の現状をとらえ直す～
	内容	地域の強みと弱みを整理し、公民館活動へとつなげていく。
5	演題	<b>公民館祭りで「あなたのまち」を活性化！</b> ～あれもできる！これもできる！！～
	内容	公民館祭りに向けて、プログラムを考える。

## 2 2年次の計画

講座企画		
テーマ	わがまちを元気にしたい人 大集合！！ ～元気な「まちづくり」をスタート！【2年次】～	
講座目標	公民館祭りに向け、地域や受講生のアイデアを生かした取組を考え、地域住民のリーダーとして必要なスキルを学ぶ。	
方法	○4回の夜間講座を実施し、公民館祭りの実施に向けた取組を通して、地域住民のリーダーとして活躍できる人材を発掘、養成する。 ○地域住民のリーダー同士の交流やネットワークの仕組みを整える。	
回数	演題・内容	講師
1	演題	いけだマナーアカデミー 代表 池田 充子
	内容	
2	演題	宇城市広報誌連載の宇輝人 宮本 春隆 内閣府地域活性化伝道師 三角 幸三
	内容	
3	演題	内閣府地域活性化伝道師 三角 幸三
	内容	
4	演題	内閣府地域活性化伝道師 三角 幸三
	内容	



- ・2年次の成果と課題を踏まえ、公民館祭りを実施する。
- ・講座受講生が、他のまちづくりの事業においても活躍できる場を模索したり、地域住リリーダー同士の交流やネットワークの仕組みを整えたりする。

### 3 2年目の講座の実際

#### 【第1回】

相手とのコミュニケーションを活性化させるために、意識しておきたい点やいろいろなタイプの人との付き合い方について実践を交えながら学んだ。また、グループで自己紹介や宇城市のよいところを話し合う活動を通して、参加者同士が少しずつ打ち解けていくことができた。



交流を深める受講生

#### 【第2回】

商店街の振興や伝統行事（初市、祭り）の継承に尽力されている地元商店街振興会から、活動の背景や取組の工夫、活動に対する思いを聞いた。活動する際に重要なことや、地域の幅広い層との交流、仲間づくりの大切さを学んだ。



取組の過程や思いを聴く受講生

#### 【第3回】

地域づくりを推進していくために、必要な考え方や企画のポイントを学んだ。また、企画や日常生活においてSDGsの視点を持つことの重要性を学んだ。実際に作品や活動の道具を目の前にし、漠然としていた企画のイメージが明確になり、地域に人が集まるためのヒントを得ることができた。



実物を見てアイデアを出し合う受講生

#### 【第4回】

講師が開発したワークシートを使い、課題把握の方法やテーマに関するアイデアの整理の仕方を学んだ。その後、そのワークシートを使い、受講生が地域で課題として感じていることや挑戦したいことを整理し、最後に全体で共有することで、実践への意欲を高めることができた。



自分の考えを整理する受講生

### 4 2年目の成果と課題

#### 【成果】

受講生同士が講座を通じてお互いの思いや立場を知り、つながりが生まれるとともに、地域のために自分ができることを考え、工夫して実践しようという意欲の高まりがみられた。

#### 【課題】

3年目の実働に向けて、取り組みたいアイデアを出し合うことはできたが、それを企画書の形に整理するまでには至らなかった。

### 5 2年目以降の展開

住民同士や関係機関相互のつながりを生かした3年目のゴール（公民館祭りの実施）を明確に示し、受講生が自主的に取り組むような講座内容の検討を行う。

【事例4】 自治公民館の活性化を目的とした講座（津奈木町）

1 1年次の計画

地 域 課 題
○地域の自治公民館の活動が、地域によって温度差がある。 ○活動が少なく、地域住民の参加も少ない地域がある。



全 体 目 標
地域で先頭に立ち活動できる人材を育成し、地域が求める公民館活動が継続できる仕組みをつくる。



講 座 企 画		
テーマ	<b>公民館が元気になると まちが元気になる ～未来につながる 津奈木のまちづくり～</b>	
講座目標	地域のまちづくり、つながりづくりにおける公民館活動の重要性を認識し、具体的な公民館活動に向けた計画を立てる。	
方法	○事前に区長会長へ説明し、理解を得る。 ○第1講を区長会に合わせて実施し、区長の理解を得る。 ○夜間講座として実施する。	
回数	演題・内容	講師
1	演題	内閣府地域活性化伝道師 三角 幸三
	内容	
2	演題	
	内容	
3	演題	
	内容	
4	演題	
	内容	
5	演題	
	内容	

2 2年次の計画

講座企画		
テーマ	<p align="center"><b>公民館が元気になると まちが元気になる</b>  <b>～未来につながる 津奈木のまちづくり～【2年次】</b></p>	
講座目標	<p>地域のまちづくり、つながりづくりにおける公民館活動の重要性を認識し、具体的な公民館活動に向けた計画を立て、公民館活動に必要なスキル等を学ぶ。</p>	
方法	<p>VTS (Visual Thinking Strategy) の手法を用いて、受講生が津奈木町の自然や芸術等のよさを生かして取り組める活動を考え、順次、実践していく。</p>	
回数	演題・内容	講師
1	演題	<p align="center">内閣府地域活性化伝道師 三角 幸三</p>
	内容	
2	演題	
	内容	
3	演題	
	内容	
4	演題	
	内容	
5	演題	
	内容	
<p align="center">モデル地区で公民館活動実施            (※新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえて検討する。)</p>		



2年次の成果と課題を踏まえ、3年時の計画を立て、地域活動の実践を目指す。

### 3 2年目の講座の実際

#### 【第1回】

地域づくりの柱となる人的資源の活用について、「まとめ役の桃太郎」「知恵者の猿」「行動力のある犬」「好奇心旺盛なキジ」「新たな視点を与えるパンダ」「広報するハト」という新桃太郎体制を例に説明があった。また、津奈木町の風景を写真にし、受講生同士がまちのよさについて伝え合った。

#### 【第2回】

SDGsの視点から、使用済の紙類やガラス類、木など、身の回りにある廃棄する物に工夫を加えることで、新たな価値を生み出すことができるアイデアを学んだ。そして、地域文化（余暇文化・芸術文化・生活文化）の創造を通じたまちづくりに向けて、活動場所や対象者をイメージしながら、具体的な活用場面を出し合った。

#### 【第3回】

活動の体験とワークショップの2部構成で講座を行った。まず、屋外でスウェーデントーチとロケットストーブの作り方、使い方、片付け方を学び、それらの活用場面を考えた。その後、室内で、受講生が現在取り組もうと考えている活動（フットパスや流木アート等）について説明し、講師からアドバイスを受けた。

#### 【第4回】

第3回までの学びを振り返りながら、津奈木町の社会関係資本をどのように生かし、活動を活性化させるのかを企画書にまとめた。交流を生み出すために、まずは地域の人的、物的資源を洗い出し、それらの活用法を図式化して、自らの考えを整理した。

#### 【第5回】

「地域を知る→地域の声を聴く→情報を構造化する→実行場所を決める→仲間を集める→構想する→小さな成功を積み重ねる」というイベントを実行するために必要な地域デザインの順序を学んだ。受講生は、自身が考える企画の実行に意欲を高めることができた。

### 4 2年目の成果と課題

#### 【成果】

受講生の多くが、津奈木町の地域活動に積極的に関わろうという強い意識を持つことができた。回を重ねるごとに、受講生からは、活動への熱い思いやアイデアが出され、活動内容をより焦点化することができた。

#### 【課題】

受講生が取り組みたい活動を出し合うことはできたが、コロナ禍からモデル地区を指定しての活動の試行まではできなかった。

### 5 3年目以降の展開

老人会、婦人会、学校等との連携を図りながらモデル地区で活動を行い、その成果を他地域の活動の充実につなげる。また、活動が衰退しないように、定期的に養成講座を実施する。



PRしたいまちの魅力を選ぶ受講生



グッズの活用法を説明する受講生



考えている活動を伝える受講生



自らの考えを企画書にする受講生



地域デザインの順序を学ぶ受講生



2節「地域の人づくり講座」1年次経過報告

【事例5】地域学校協働活動推進員等の人材育成を目的とした講座（荒尾市）

1 1年次の計画

地 域 課 題
地域学校協働活動推進員等の人材発掘や後継者の育成を図りながら、継続的な地域学校協働活動を行う必要がある。



目 標
地域学校協働活動推進員等に求められる知識や技能を学び、地域学校協働活動の実際に生かそうとする態度を養う。



講 座 企 画		
テーマ	<b>大好きなあらおっ子の“育ち”のために！ ～あらお（ベーシック）版 地域学校協働活動をすすめよう！～</b>	
方法	○受講対象者は、地域学校協働活動推進員等及び学校関係者等とする。 ○地域学校協働活動推進員等から活動内容を学校へ提案できる取組を入れる。	
回数	演題・内容	講師
1	演題	<b>聞いて、教えて みんなの実践！ ～地域学校協働活動は幅が広い～</b>
	内容	参加者同士が自分の実践を伝え合い、自分の取組を振り返るとともに、視野を広げる。
2	演題	<b>推進員に求められていること ～私にできること みんなでできること！～</b>
	内容	学校運営協議会との連携を含めた推進員の役割やCSの事例等を学ぶ。
3	演題	<b>行って、見て、感じて！ ～先進地事例や先進者から学ぼう～</b>
	内容	先進地事例や先進校事例を通して、活動の取組方や子供の育ち等について学ぶ。
4	演題	<b>地域学校協働活動が楽しくなるコツ！ ～心の距離を近づけるコミュニケーション術！～</b>
	内容	学校・行政職員、ボランティア、子供や保護者等をつなぐコミュニケーションスキルや、様々な支援方法を学ぶ。
5	演題	<b>地域と学校の連携 ～CSMAPに挑戦してみよう～</b>
	内容	学校のニーズや地域資源（人・もの・こと）の情報を収集、整理し、地域学校協働活動の計画の立て方を学ぶ。



1年次の成果と課題を踏まえ、2年時の計画を立て、地域学校協働活動の定着を目指す。
--

## 2 講座の実際

### 【第1回】

地域学校協働活動に係る国・県・市の施策等について知り、地域学校協働活動推進員等に求められる知識を得た。そして、受講生一人一人が活動を通して感じている課題を出し合い、活動に必要な心構えやコーディネートの方法について考えた。活発な意見交換が行われ、推進員としての意欲の高まりが見られた。

### 【第2回】

地域学校協働活動とCSの一体的な推進について、当該教育事務所管内の様々な事例を学んだ。受講生は、自らの取組を振り返りながら、活動のブラッシュアップやウィズコロナ・アフターコロナ時代の活動の在り方について、ロールプレイを交えながら考えることができた。

### 【第3回】

上天草市立姫戸中学校の地域学校協働活動の事例に学んだ。「地域の子供は地域で育てる」という理念の基、活動されている地域学校協働活動推進員の思いに触れた。学校のニーズに応えるとともに、地域から学校へ活動を提案する双方向の関係づくりや、公民館等と連携・協働した手法を知れたことは、受講生の深い学びとなった。

### 【第4回】

地域学校協働活動推進員等に求められるコミュニケーションスキルについて学んだ。まず、パーソナルタイプを4つに分類して自分のタイプを知った。その上で、活動を円滑に進めるために、子供や関係者等の立場に立ったコミュニケーションが大切であることを学んだ。笑顔の絶えない明るく、楽しい雰囲気での講座であった。

### 【第5回】

豊富な実践を基に地域と学校の連携・協働の在り方について学んだ。活動を継続するためには、地域と学校の双方にメリットがあることや、お互いができる範囲で行動することが大切だと学んだ。また、学校の年間計画と地域資源のマッチングを考える「CSMAP」の手法は、受講生に大変好評であった。

## 3 1年目の成果と課題

### 【成果】

地域学校協働活動の意義や求められている背景についての学び直しや、具体的な活動事例を学べたことは、受講生の活動意欲の向上につながった。また、毎月1回、講座を開催したことで、受講生同士が定期的に情報交換を行うことができ、連携強化が図られた。

### 【課題】

学校からのニーズに対応する(受動的な活動)ことから、学校へ活動を提案する(能動的な活動)ことへの取組が十分に達成できなかった。

次年度は、能動的な活動に向けた講座内容や地域の環境づくりに取り組む必要がある。

## 4 2年目以降の展開

定期的に講座を開催し、受講生同士の交流を図るとともに、受講対象者を地域学校協働活動推進員に限らず、各学校で活躍している地域ボランティア等対象者を拡大することでより広い範囲で人材の発掘・育成を行っていく。地域と学校の双方向の活動となるよう具体的な活動計画を早い段階で作成し、地域、行政、学校で情報の共有を図る。



活動に対する思いを伝え合う受講生



活動の改善点を発表する受講生



活動のアドバイスを求める受講生



自分のパーソナルタイプを調べる受講生



学校の年間計画とのマッチング  
を考える受講生

【事例6】地域学校協働活動推進員等の人材育成を目的とした講座（八代市）

1 1年次の計画

地 域 課 題
○地域学校協働活動を推進していくため、新たな人材の育成が必要である。 ○継続的な地域学校協働活動の仕組みを整える必要がある。



目 標
地域学校協働活動に係る施策や事例等を知り、地域学校協働活動推進員等（地域コーディネーター）に必要な知識や技能を学ぶ。



講 座 企 画		
テーマ	<b>あなたの力が、やっしろの子供・地域を育てます！ ～やっしろの絆でつむぐ地域学校協働活動！～</b>	
方法	○受講対象者は、地域学校協働活動推進員等及び学校関係者等とする。 ○学習形態は、講義形式とワークショップ（参加体験型）を織り交ぜて行う。	
回数	演題・内容	講師
1	演題	<b>八代版 地域学校協働活動に期待されること！ ～「お互い様」が、地域、学校、子供、住民をつなぐ～</b>
	内容	地域、学校、家庭の連携・協働の意義や在り方を学び、地域学校協働活動推進員等の役割を考える。
		元県統括コーディネーター 浅野 一登
2	演題	<b>できるとき、できる範囲が合い言葉！ ～地域学校協働活動でやれること！～</b>
	内容	地域学校協働活動の具体例を知り、地域における役割とその位置づけを学ぶ。
		荒尾市地域学校協働活動 推進員 田中 なつみ 県子ども会連合会 事務局長 横手 宏公
3	演題	<b>地域学校協働活動が楽しくなるコツ①！ ～心の距離を近づけるコミュニケーション術！</b>
	内容	学校・行政職員、ボランティア、子供や保護者などをつなぐコミュニケーションのスキルを学ぶ。
		いけだマナーアカデミー 代表 池田 充子
4	演題	<b>地域学校協働活動が楽しくなるコツ②！ ～やっしろの宝（ひと・もの・こと）を生かす術～</b>
	内容	地域資源（ひと・もの・こと）の見つけ方を知り、地域資源を地域学校協働活動につなげていくよさを学ぶ。
		熊本県立大学 教授 柴田 祐
5	演題	<b>地域のSOSを読み解く！ ～みんな笑顔 やっしろのまちづくり～</b>
	内容	地域の様々な課題解決に向け、地域の強みを生かした取組について考える。
		八代市学校教育課 指導主事 前田 博治 八代市教育サポートセンター 支援相談員 西村 文子



1年次の成果と課題を踏まえ、2年時の計画を立て、地域学校協働活動の定着を目指す。
--

## 2 講座の実際

### 【第1回】

現代の子供たちが大人に成長した未来社会のイメージを受講生間で共有した。よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るといふ理念の実現に向け、防災教室やクラブ活動、校外学習などの具体的な活動例を通して、地域学校協働活動推進員等としての役割を考えた。活動には、「お互い様」の気持ちが大切だということを学んだ。

### 【第2回】

令和元年度地域学校協働活動推進に係る文部科学大臣表彰受賞校の荒尾市立桜山小学校の地域学校協働活動の実践から、「子供が主役」の具体的な活動について学んだ。会場には、地域学校協働活動推進員等や学校関係者が集い、各々の立場から地域学校協働活動の取組を考えることができた。

### 【第3回】

地域学校協働活動を進めるために必要なコミュニケーションスキルについて学んだ。「目を見る、微笑む、あいづちを打つ」などの体験活動を通して、信頼関係づくりで大切にしたいことを考えた。活動の推進における関係機関・関係者とのよりよい関係づくりに生かせる学びとなり、受講生の笑顔が絶えない講座であった。

### 【第4回】

高等教育機関のまちづくりの事例に学び、地域の「ひと・もの・こと」を生かした地域学校協働活動の手法を考えた。受講生からは、伝統行事や各団体との交流など、取り組みたい具体的な活動が出された。「とりあえずやってみる、異なるものを混ぜてみる、自分が活動を楽しむ」など、活動を進める上でのコツを教わった。

### 【第5回】

子供を取り巻く現状を知り、子供が安心して生活できる環境を整えるため、子供の居場所づくりや絆づくりについて考えた。会場には地域学校協働活動推進員等や学校関係者等が参加し、課題解決の方向性を共に確認できた。また、子供の自尊感情を育むためには、地域、家庭、学校、子供、関係機関の連携・協働が大切だと学んだ。

## 3 1年目の成果と課題

### 【成果】

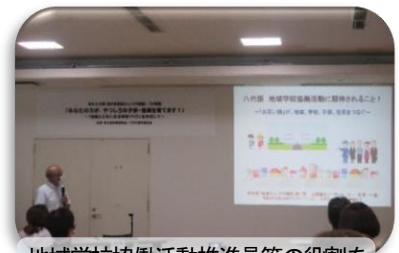
地域学校協働活動推進員や学校関係者、主任児童委員など、様々な立場の方の参加があり、地域学校協働活動についての情報共有や制度理解を促すことができた。受講生アンケートには、「参考になる内容で有意義な講座であった。」との記述が多く見られた。

### 【課題】

講座の学びを地域学校協働活動に生かした地域とコロナ禍から余儀なく活動を制限せざるを得ない地域があり、地域学校協働活動推進員等の経験値に差が生じた。

## 4 2年目以降の展開

受講生同士の情報交換を図り、活動の質を高めるとともに、新規人材の発掘・育成を継続する。地域学校協働活動推進員等と学校、地域との情報交換を行うネットワークを構築する。



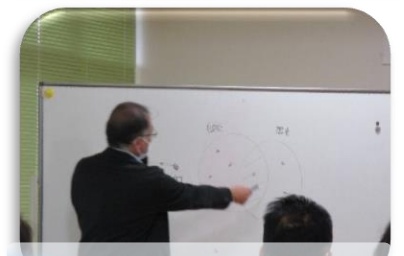
地域学校協働活動推進員等の役割を学ぶ受講生



先進的な事例を学ぶ受講生



コミュニケーションのコツを学ぶ受講生



地域資源の分類法を学ぶ受講生



自尊感情の高め方を学ぶ受講生

【事例7】地域学校協働活動推進員等の人材育成を目的とした講座（玉名市）

○1年次の計画

（※1月から開講のため企画のみ掲載）

地 域 課 題
○地域学校協働活動推進員の経験の差が大きい。 ○中学校区以外の地域学校協働活動推進員同士の連携や交流が活発でない。



目 標
地域学校協働活動推進員同士の横のつながりをつくるとともに、求められるコミュニケーションスキルを学び、活動の実際に生かそうとする態度を養う。



講 座 企 画		
テーマ	つながる つなげる 地域と学校 ～仲間と一しょに地域学校協働活動 入門編～	
方法	○参加者同士の交流活動の場を多く設定する。 ○学校支援活動に焦点をあてた内容を実施する。	
回数	演題・内容	講師
1	演題	不安が期待に変わる！ ～聞いて、聞かせて推進員の胸の内～
	内容	アイスブレイクや推進員としての不安等の語り合いを通して、仲間づくりの素地を作る。
		内閣府地域活性化伝道師 三角 幸三
2	演題	活動が楽しくなるコミュニケーション術！ ～人とつながるコツが分かる！～
	内容	地域学校協働活動に関わる人たちをつなぐコミュニケーションスキルや、相手の話を引き出す話術について学ぶ。
		いけだマナーアカデミー 代表 池田 充子
3	演題	子供たちは、地域の宝もの ～子供たちの瞳が輝くこと教えます！～
	内容	学校の実際の活動や学校が困っていることを知り、学校支援を中心とした活動につなげる。
		玉陵中学校 校長 丸塚 慎一郎
4	演題	活動のヒントが満載！ ～上手くいっている事例には必ず理由がある～
	内容	地域学校協働活動の好事例をとおして、「活動のきっかけ・質の向上・継続に必要なこと」などを学ぶ。
		県統括コーディネーター 山平 敏夫
5	演題	仮想 地域学校協働活動 ～「やってみたい」を形にする～
	内容	やってみたい活動を参加者同士で考え、今後の実践のヒントとする。
		県統括コーディネーター 山平 敏夫



1年次の成果と課題を踏まえ、学校支援活動を中心に活動を充実させる。
-----------------------------------

### 3節 「サテライト教室」

【事例8】 デジタル・ディバイドの解消と仲間づくりを目的とした講座（南関町）

#### ○ 計画

（※2月から開講のため企画のみ掲載）

地 域 課 題
<p>○スマートフォン・タブレット等の使い方講座実施の要望が多い。 ○スマートフォン・タブレット等を使い、遠隔の人とつながるなど新たなコミュニケーションの方法を身に付けてほしい。</p>



目 標
<p>身近に存在する情報端末機器を使用したコミュニケーションについて具体的に学び、日常生活の中で積極的に人と関わっていかうとする意識を高める。</p>



講 座 企 画		
テーマ	<b>気軽にできる！スマートフォン 入門講座！</b> <b>～スマホでつなげる 友達の輪～</b>	
方法	<p>○技能習得を目的とするため、実技を中心とする。 ○仲間づくりのため、受講生同士の交流の場を設定する。</p>	
回数	演題・内容	講師
1	演題	<b>スマホでコミュニケーション①</b> <b>～文章のやり取りが気軽にできる！～</b>
	内容	<p>アイスブレイクで受講生同士の交流を図るとともに、アプリを使い、文章のやり取りなど簡単な操作を行う。</p>
2	演題	<b>スマホでコミュニケーション②</b> <b>～写真や動画のやり取りが気軽にできる！～</b>
	内容	<p>アプリを使い、写真や動画のやり取りの操作方法とともに、個人情報流出の危険性についても学ぶ。</p>
3	演題	<b>スマホでコミュニケーション③</b> <b>～脳トレや運動が気軽にできる！～</b>
	内容	<p>アプリやインターネット上の動画を利用して仲間とともに脳トレや運動などを行い、今後の健康づくりやつながりのきっかけとする。</p>
<p>アビリティスクール マリオネット 代表取締役 村上 奈美</p>		



<p>今回の講座内容を日常生活で実践してもらい、もっと深く知りたいこと、やってみたいこと等の意見を聞く。また、防災など必要な情報を受信するツールとしての活用にもつなげていく。</p>
---

## 第4章 コロナ禍、豪雨災害における実践例（県の取組）

### 【事例1】県民カレッジ主催講座の取組（動画配信、学生の参画）

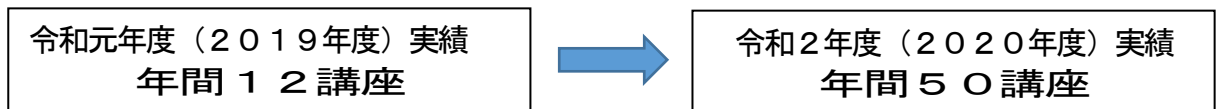
#### 1 目的

くまもと県民カレッジは、県民の生涯学習機会の充実を図るために、県内市町村や関係機関等と連携・協働しながら、年間130程度の講座を実施している。

また、遠隔地の県民や働いている世代に生涯学習の機会を広げるために、インターネットを活用していつでも、どこでも学習することができるよう生涯学習講座等の動画配信を実施し、生涯学習への関心を高めている。

#### 2 動画配信の実際

##### (1) 令和元年度（2019年度）及び令和2年度（2020年度）実績



##### (2) 学生ボランティアの参画

くまもと県民カレッジの課題の1つは、当事業に対する学生や現役世代の関心を高めることである。

そこで、今年度、生涯学習に触れる機会を学生に広げる取組として、県生涯学習推進センター内に活動の場を提供した。県内の大学と連携し、映像に興味を持つ学生27名を「熊本県生涯学習推進センター学生ボランティア（動画制作）」として受け入れた。

学生からは、「スキルアップにつながる貴重な機会である」「動画を見る方の立場に立った活動の大切さを感じている」「大学の学びを社会貢献に生かしたい」などの声があった。

##### 【学生が活動するための主な手続き】

- ・県生涯学習推進センターと大学担当者との間で、業務内容等について共通理解を図る。
- ・「熊本県生涯学習推進センターの情報管理に関する規程」に同意した学生をボランティアとして登録する。
- ・県生涯学習推進センターが学生の安全保険の加入手続きを行う。
- ・年度末、県生涯学習推進センターがボランティア活動の「認定証」を発行する。

##### (3) 動画配信業務における主な留意点

- ・講師や所属長に動画撮影及び動画公開期間の承諾を事前に得る。
- ・動画の時間は、基本60分以内とする。（集中して視聴できる時間にする）
- ・資料等の著作物については、事前に関係機関の使用許可を得る。
- ・撮影した動画の削除や結合等の編集について、事前に講師から承諾を得る。
- ・編集後の動画は、社会教育課と生涯学習推進センターの二重チェック体制で確認する。

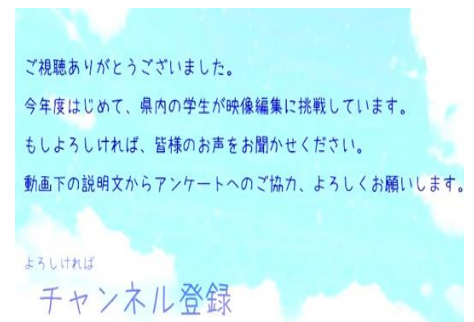
#### 3 成果と課題

##### 【成果】

コロナ禍から講座運営を対面方式から動画配信方式へ切り替えたことや、大学生ボランティアを活用したことで、例年の4倍以上の動画をYouTubeで配信することができた。その結果、視聴数は3倍に増え、より多くの県民に学習機会を提供できた。

##### 【課題】

「新しい生活様式」が求められる中、対面方式と動画配信方式の学習効果を検証しながら、講座運営のさらなる改善を図っていく必要がある。



【学生が制作した動画のエンドロール】

## 【事例2】第43回全国公民館研究集会・第71回九州地区公民館研究大会 熊本大会

### 1 目的

テーマを「開かれ、つながる社会教育の実現を目指す～地域コミュニティの維持と防災拠点としての役割～」とし、九州各県の社会教育に携わる参加者一人一人が、新しい地域づくりに向けた「人づくり」「つながりづくり」「地域づくり」という学びと活動の好循環の中心となっていく。

### 2 取組の実際

#### (1) 紙上開催

8月に、熊本城ホールにて開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため従来の参会する方法は中止とし、大会冊子を作成・送付し関係者が内容について共有を図る紙上開催とした。

#### ◆記念インタビュー◆

群馬県と熊本県をオンラインでつなぎ、記念講演で御講演をいただく予定だった、東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センターの片田敏孝特任教授にインタビューを実施したものをまとめた。「災害犠牲者ゼロの地域づくり」をテーマに「防災とコミュニティ」や「釜石の奇跡」等の話があった。「災害犠牲者ゼロ」への熱い思いとともに、「釜石の奇跡」は偶然ではなく必然であることが分かる話である。

#### ◆分科会◆

8つのテーマのもと九州各県から16の事例と8つの助言が寄せられた。事例発表者と助言者の顔写真を掲載した。事例発表原稿は、当初2ページの予定だったが、質疑応答の時間が無いということで、2ページ～5ページに紙面を拡充させ、より詳細な原稿を作成いただいた。助言の原稿作成も依頼し、各事例に対する的確な評価とともに、時代の流れをとらえた今後の展望などにも触れていただき、多くの示唆に富んだ助言をいただいた。

#### ◆特集「復興祈念」◆

熊本地震から4年が経った。多くの方々からの支援に対し、感謝の気持ちを伝えようと、「熊本地震記憶の継承」をテーマに、NPO法人故郷熊本復興研究所の方々を中心となり、コミュニティや公民館、個人の復興のあゆみをまとめた。復興のあゆみの中で得られた「学び」や、感じた「喜び」、そして「感謝の気持ち」が綴られている。「あったらいいな、こんな公民館」をテーマにした座談会も収録するなど、バラエティに富んだ内容になっている。

#### (2) 大会冊子の音声化

紙上開催となったので、視覚障がい者をはじめとする多くの方々大会冊子に触れることができる環境を作りたいという思いから、大会冊子の内容を音声訳ボランティアの方々の協力により音声化した。音声データについては、熊本県教育庁HPに掲載している。

《URL》

<https://www.pref.kumamoto.jp/site/kyouiku/61689.htm>

### 3 成果と課題

#### 【成果】

- ・九州内外から3,000冊を超える申込をいただいた。
- ・テーマに沿った内容構成になり、趣旨が十分伝わったことがアンケート結果から分かる。
- ・「じっくり読める」「人に紹介できる」などの声もいただき、紙上開催のよさも伝わった。

#### 【課題】

- ・大会冊子の音声化は、音声訳と朗読の違いを含めて周知すべきであった。



【大会冊子の表紙】



《QRコード》



### 【事例3】学習成果活用（体験ボランティア、学習支援ボランティア）

#### 1 目的

令和2年7月豪雨災害に係る避難所の児童・生徒の生活・学習支援では、既存の体験活動ボランティアチームに加え、新規の県内大学等の学生や社会人から学習支援ボランティアチームを募集し、被災地支援として、ボランティアそれぞれの人生における学びや経験を社会参画に生かした派遣事業を行った。

#### 2 取組の実際

##### （1）参加ボランティアチームの募集

###### ① 体験活動ボランティアチーム

青少年教育施設や各種団体の代表者を通じて、学習支援に加え、児童・生徒の心身のリフレッシュとなるレクレーション等の体験活動の実施を依頼した。

###### ② 学習支援ボランティアチーム

県内大学等へ募集を依頼するとともに、新聞やニュース等のメディアへ報道を依頼し、学習支援に特化したボランティアを募集した。

##### （2）派遣実績

人吉・球磨、八代管内へ、10月までに180回延べ262人の派遣を行い、児童・生徒の家庭学習の支援、心身のリフレッシュとなる体験活動を提供できた。

###### 〈主な体験活動例〉

- ・マジックショー
- ・音楽遊び
- ・工作
- ・科学体験遊び
- ・プログラミング
- ・運動遊び等

##### （3）認定NPO法人カタリバとの連携

熊本地震で被災地支援の経験のある認定NPO法人カタリバと連携したボランティア派遣及び被災地支援を行った。派遣者の調整や事務処理を社会教育課が担い、現地での派遣者の受入や対応をカタリバに担っていただいた。



【プログラミング学習の様子】



【避難所で行われた夏祭りの様子】

#### 3 成果と課題

##### 【成果】

- ・体験活動と学習支援両面の派遣にしたことで、青少年教育施設の職員、学生や現役教諭、退職校長等、多くの方の協力が得られ、学習だけでなく、実験や工作、運動遊び等の多様な体験活動を提供することができた。また、ボランティアによる子供に寄り添った支援により、子供たちの学びの保障や安心して過ごせる居場所づくりとなった。
- ・参加した大学生からは、「様々なスキルを持った方と一緒に活動したことで、自分自身にとっても良い学びができました。」という声があり、社会参画に対する意欲の高揚につながった。
- ・認定NPO法人カタリバとの連携したボランティア派遣及び被災地支援により、現地のニーズに応じたボランティア派遣を行うとともに、日々刻々と変わる子供たちの心の変化にもタイムリーな対応が可能となった。

##### 【課題】

- ・刻々と変わる被災地の子供たちの生活環境や心理状態について、現在の状況やニーズに応じた支援をするため、プログラム内容を具体的に例示したり尋ねたりする等の手法により、情報共有体制を確立する必要がある。

## 【事例4】「親の学び」講座（オンライン講座、オンデマンド講座）

### 1 目的

コロナ禍、豪雨災害により、これまでのくまもと「親の学び」プログラムを活用した講座開催が厳しい状況が続いている。そのような中「親として学び、親同士のつながりをつくる機会」を構築していくための手段としてオンライン講座、オンデマンド講座に取り組む。

### 2 取組の実際

オンライン講座（Zoomを使って参加者をリモートでつなぎ、意見交換や交流を図る講座）

「親の学び」推進園として「親の学び」講座の普及に協力いただいている保育園に依頼し、保護者が参加しやすい時間帯に30分程度実施した。1回目は社会教育課職員が進行及び機器の操作役を務め、2回目以降は園内で研修会を実施し、参加者と信頼関係を築いている保育園職員が務めた。1回の参加者は4、5名程度に限定し、複数回実施することで、コロナ禍における保護者の不安や悩みの軽減に努めた。

また、熊本市の公民館で実施している家庭教育学級でも同様の講座を「親の学び」プログラムトレーナーが実施した。



【オンライン講座の様子】

### オンデマンド講座

県教育委員会が実施した児童生徒対象の「コロナに係るアンケート」結果を分析し、不安や悩みとして高かった項目を講座のテーマとして「親の学び」講座を動画で配信し、親として学ぶ機会を提供している。短時間で、自分の都合のよい時間に視聴できるというオンデマンド配信の特性や保護者のニーズを踏まえた構成となっている。

「親の学び」プログラムトレーナー研修会や進行役講座において紹介し、就学前施設や小中学校で活用していただいている。



【オンデマンド講座】

### 3 成果と課題

#### 【成果】

- ・ これまでは、講座を実施するに当たって、「参加してほしい保護者が来てくれない」「毎回、参加者が同じ」という意見が多かった。オンライン講座及びオンデマンド講座を実施することにより、参加者は自宅にて参加できるので、様々な事情によりこれまで参加できなかった保護者に参加していただき、園や他の保護者とのつながりを深めることができた。

#### 【課題】

- ・ オンライン講座を普及するにあたり、ハード面の整備や機器の操作に関するハードルが高いため、研修等の機会を充実する必要がある。
- ・ オンデマンド講座は、現在、3つのテーマについて配信している。今後、保護者のニーズに応えられる題材や発達段階ごとのプログラム等、魅力あるプログラムの作成・配信をしていく必要がある。

## 第5章 生涯学習コーディネーター養成講座

### 【事例1】生涯学習

#### 1 テーマ

人が集まる仕組みづくり

～あなたのアイデアと地域との協働でまちが動き出す～

#### 2 概要

##### (1) 生涯学習の核づくり

行政や学校、NPO団体など様々な立場から生涯学習に求められていることについて学ぶ。

##### (2) 人が集まる仕組みづくり

住民のニーズの把握の方法、地域に交流が生まれる講座づくり、地域との協働による講座づくり、社会関係資本の構築につながる地域づくり等、講座企画のノウハウを学ぶ。

#### 3 講師

内閣府地域活性化伝道師 三角 幸三 氏

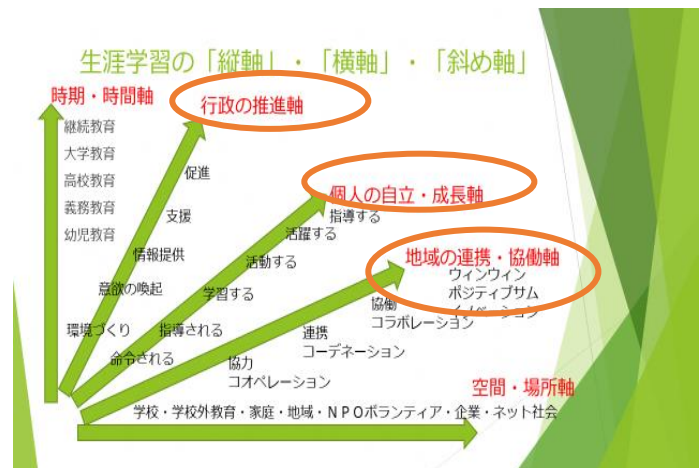
#### 4 講座内容プロジェクト

##### (1) 生涯学習の核づくり

生涯学習を縦軸を時間軸、横軸を空間・場所軸と設定した場合、斜め軸が重要である。(右図参照)

個人の成長のためには、行政や地域がどのような位置で、どう関わるのかが大切である。

それぞれの立場(個人、行政、地域)が、自分たちの状況がどの過程にあるのか、どの方法があてはまるのかを考えて取り組むとよい。



【生涯学習の「縦軸」「横軸」「斜め軸」】

個人の成長軸：指導される→学習する→活動する→提案する→指導する

行政の推進軸：環境づくり→啓発→情報提供→支援→連携促進

地域の連携・協働軸：協力→連携→協働

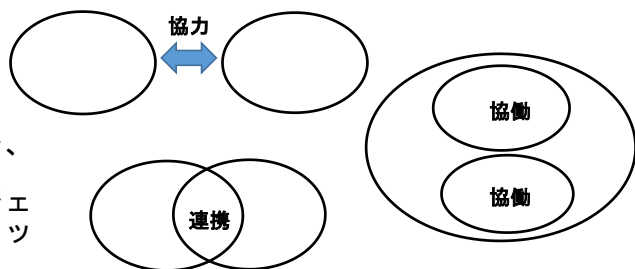
#### 「協力、連携、協働」の違いとは？

協力とは…困っていたら応援すること

継続性はない

連携とは…一部分(同じような部分)を、一緒にすること

協働とは…一つの目的のために、プロジェクトチームをつくってタイアップすること



【企画案の整理法の紹介】

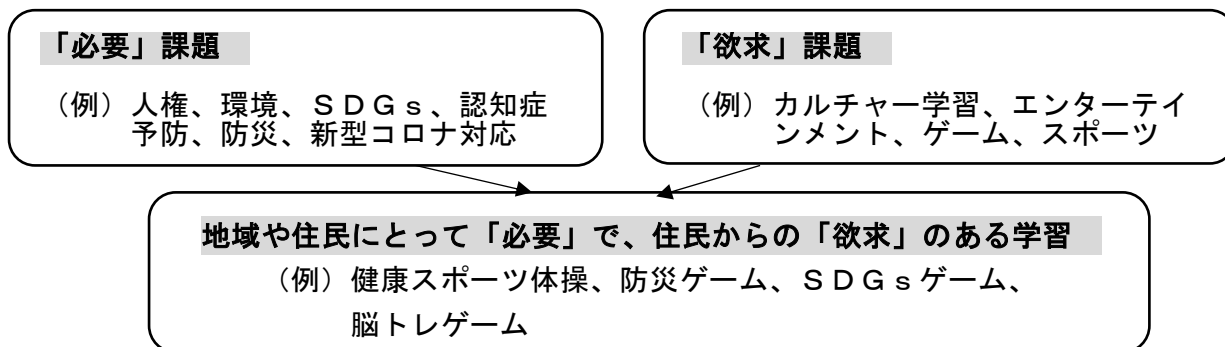


【体験を取り入れた講座の紹介】

## (2) 人が集まる仕組みづくり

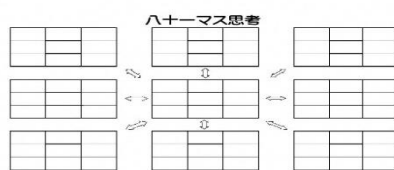
### ○学習内容の設定

学習内容には、住民が個人として学習しなければならないこと（必要課題）と、住民がやりたい学習や体験したいこと（欲求課題）がある。どちらか一方では、参加者数や参加者の満足度に影響が出る。地域や住民の実態を考慮し、必要課題と欲求課題の2つを相乗効果がでるようにうまく組み合わせた学習内容を設定することが大切である。そうすることで、参加者は楽しい活動の中で、必要な学びを得ることになる。

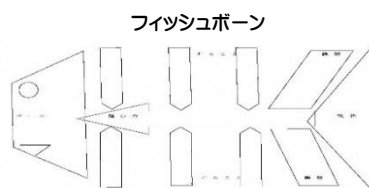


### <図で思考して考える>

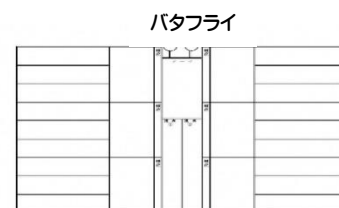
- ・ アイディアを絞り出すブレスト思考（81マス思考、マンダラート）
- ・ 問題解決のためのプロジェクト思考（フィッシュボーン）
- ・ 全体を俯瞰しながら構想する思考（バタフライ）



▲ アイディアをマス目書き、外化することで、思考を深めたり、目標設定をしたりできる。



▲ 課題解決のために「すること・しないこと」を明確化して実践することでゴールを目指す。



▲ アイディアを書き出しながら整理し、最後に順位付けをし、高順位のものから実践する。

### ○人気のある講座づくりのヒント

- ① マンネリ・前例主義から脱却する。
- ② 「やりたいことは何？」と漠然と尋ねない。

いくつか例示して、「どれがいいですか。それとも、他にやりたい事ありますか」と尋ねて参加者に決定させることで、参加者に責任感が生まれ、主体性をもった学習や活動となる。

- ③ 価値はそのままにして、楽しさを加える。
- ④ 入力（講義講演型）、出力（地域貢献型）、交流（絆・交歓型）の3つの学習をバランスをとる。

※コロナ禍での企画は、「物は共有しないが、心を共有する工夫」「3密を避けるプログラム」を考える必要がある。

### 【受講者の声（アンケートより）】

- ・ 次年度の公民館講座の企画を考える時、地域のニーズや課題等を思考フレームにあてはめながら考えていきたい。
- ・ 本日学んだ学習方法、考え方、講師設定の仕方、思考フレームを照らし合わせて考えて、PTA・地域活動で実践していきたい

## 【事例2】事業企画

### 1 テーマ

脱・事業のマンネリ化！  
～企画力で参加者を増やす5つのコツ～

### 2 概要

生涯学習に関する事業を魅力ある事業にするために、現在行っている事業を見直しブラッシュアップしたり、新しい事業を生み出したりする手法を学ぶ。

### 3 講師

国立阿蘇青少年交流の家 次長 北見 靖直 氏



【事業企画のポイントを説明する様子】

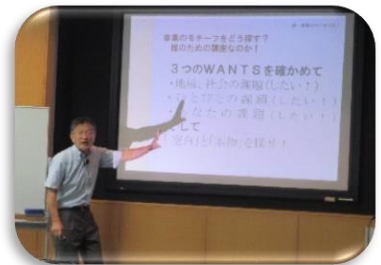
### 4 講座内容

#### (1) 事業企画は情熱だ！～事業企画の大切な心構え～

よい事業とは、住民のための事業になっていることである。住民の思いや住民の役に立つ内容を入れた事業には人が集まってくる。そして、事業に担当者の思いや本気があるかどうかが大変である。担当者の本気が、多くの人を巻き込み、多くの協力者を得ることにつながる。一から事業を作り直すつもりで、主旨、目的の部分をもう一度しっかりと読み込む、練り直すという気持ちがあるかが大切である。

事業を企画する際、「前任者に悪い」「これまでのやり方だから」などと考えるかもしれないが、事業の本質を変えないで、その時のニーズに応じて手段（プログラム）を変えていく必要がある。

事業は生き物であるので、そこに担当者の思いが込められなければならない。だから、毎年、同じ内容はあり得ない。



【事業の目的の大切さを説明する様子】

<北見講師にとって忘れられない言葉>

・「ひとを集めるからひとが集まる」へ

長崎県諫早市「子どもの城」館長 池田 尚 氏

・「昨年度同様で、という言葉が一番さみしい」

演劇企画「くすのき」代表 大多和 勇 氏

・「原義は一から書き直す」

平成2年度年東京都職員研修講師秘書課長

#### (2) 事業にメッセージはありますか？

何を目的にプログラムが組まれているかを、担当者が自分の言葉で語れるようになることが大切である。目的が消えてしまった事業に活性化は望めない。どこでも誰でも同じようなことをするから、マンネリ化が生まれる。その施設ならではの「独自性」を大切にしてほしい。誰のための講座なのか、自分の施設の地域性や特性、機能を十分活用して事業を組んでいくとよい。

また、事業は担当者だけで作るのではなく、たくさんの方々と共に作っていく、仲間作りをしながら作っていくことが大切である。

#### (3) 事業にストーリーはありますか？

担当者は「学習者」と「本物」との出会いの場を作ることが役割である。事業のポイントは「導入→展開→まとめ・つながり」というストーリーがあるかどうかである。「学習者は何をしたいのか」という学習者の思いを一番に考えてプログラムを考える。また学習者のアウトプット、講師のインプットのバランスが大切である。学習者が受け身では感動は生まれない。語り合う、話し合うシーンなどアウト

プットのシーンを設定することで、学習者の主体性が生まれる。この主体性をどう引き出すのかという視点で企画するとよい。この主体性（学習者が生き生きと活動できたかどうか）は、事業の評価のポイントにもなる。

#### (4) 広報に失敗していませんか？

##### ▷参加者が集まらない原因

- ・チラシが、実は配られていない。  
→送るだけではなく、送り先に広報をお願いする。いつ対象者に届けばよいかを計画的に準備する。
- ・もっと大切な予定がその日にある。  
→学校行事、地域行事などを調べて、対象者が来やすい日を設定する。
- ・何をする企画か伝わらない。  
→講座タイトルは分かりやすくシンプルな表現をする。新聞の見出しの書き方は参考になる。

##### ▷分かりやすいタイトルの付け方

- ・タイトルは、事業をイメージすることができるように付ける。  
(阿蘇青少年交流の家の例)  
△大草原の贈り物 (とても素敵なタイトルだが、活動がイメージできない)  
↓  
○阿蘇一周 100 kmチャレンジキャンプ (活動が明確になった)
- ・「の」を付けたタイトルはヒットするという通説がある。  
例 千と千尋の神隠し・鬼滅の刃
- ・サブタイトルは、参加者の「Wants」を表現した言葉で、さらに参加者にメリットのある言葉で付ける。  
例 見つけた！ボランティアのはじめの一步

#### (5) 失敗は成功のもと！

##### ▷講座・講師選びのポイント

###### ①分かりやすい

講師は、肩書やネットから仕入れた情報ではなく、「事例をよく知っている、当事者の声を知っている、再現できる」人がよい。実際にその講師の話聞いた人からの情報を得るとよい。

###### ②日々の生活にすぐに役立つ

「いい話だった」で終わるのではなく、学びの後、これまでと何か違う行動を起こすような情報をもっている講師。

###### ③豊かな生活につながっている

受講生から「心が豊かになった」「多様に考えられるようになった」などの感想が出るような講師。

##### ▷人が集まらない時

- ・申込者への広報協力 (友人等のお誘いのお願い)
  - ・「縁」ある人への広報
  - ・関係機関
  - ・最後は家族、親類
- ※人が集まらないことを、早い段階で表に出す (多くの人に相談する) ことが大切

##### ▷受講生にトラブルメーカーがいた時

- ・あえて話す、避けない
- ・注意ではなく、お願いする形に変えて話す
- ・一人で抱えない

#### 【受講者の声 (アンケートより)】

新しいことを始めるには不安も大きいですが、『成功は失敗から生まれる』の言葉を聞き、まずやってみようと思った。地域を変えるには職員が変わること、そして職員が変わるためには何ができるのかを考えていきたい。

## 第6章 他県における人づくり、地域づくりの先進事例

本章は、動画配信にて行った生涯学習コーディネーター養成講座〔3〕をまとめたものである。

### 全体テーマ

あなたのまちがつながる！～人づくり、地域づくりの仕組みを伝授～

### 講師陣

#### 【全体のコーディネーター】

熊本大学熊本創生推進機構 准教授 田中 尚人

#### 【先進事例1】

広島県広島市文化財団安公民館 社会教育主事 為政 久雄

#### 【先進事例2】

高知県NPO砂浜美術館 理事長 村上 健太郎

#### 【先進事例3】

千葉県四街道市政策推進課 係長 齋藤 久光

### プロローグ

#### 人づくり、まちづくりに求められるもの

熊本大学熊本創生推進機構 准教授 田中 尚人

SDGsは、国連が進めている持続可能な開発目標である。この中で大切になってくるのがシビックプライドである。シビックプライドとは地域への愛着（地域愛）のことで、まちづくりを進める中で大切になってくるマインドである。SDGsの17の目標の達成に向けて取り組むとき「誰一人取り残さない。」「すべての人に役割がある。」「1つ1つ分けて取り組むのではなく、横串をさし、まとめて考える。」と考え、「みんな違って、みんないい。」という構えで「自分ごと」としてとらえることが大切になってくる。

まちづくりのワークショップを行う時に、守るとよい3つのおまじないがある。①「他人を否定しない。」②「人の話をちゃんと聞く。」③「自分の言葉で話す。」である。まちづくりは専門家だけが取り組むものではなく、老若男女、住民皆で取り組むのがいい。

海士町がつくった有名なポスターに「ないものはない。」という言葉がある。これには2つ意味があり、1つは「無いものは無いのだから仕方がない。あるものでやっぺいこう。」という意味、もう1つは「無いものは無い。全てある。」という意味である。海士町から関係者を招いて話を聞いたときに「Iターンを考えると、どこの地域でも10人呼んだら9人は帰ってしまう。海士町も同じだが、海士町は100人呼んでいるので10人残っているだけ。それだけ、多くの挑戦をしている挑戦事例なのだ。」との話があった。挑戦することの大切さを学んだ。

熊本地震、新型コロナウイルス、令和2年7月豪雨とあったが、まちづくりを止めるわけにはいかない。災害前と災害後をつなげて考える、非日常と日常をつなげていくことが大切である。

「まちづくりを自分ごとに」これが本講座のメインテーマとなる。



【田中准教授の講話の様子】

## 先進事例 1

### 公民館がコーディネートする人づくり・地域づくりの仕組み

このまちにくらしたいプロジェクト～中学生がつくる 30 年後の未来のために今できること～

広島県広島市文化財団安公民館（前 古田公民館） 社会教育主事 為政 久雄

#### ◆まちの紹介◆

広島市西側に位置する閑静な住宅街である古田地区（古田中学校区）に古田公民館がある。広島市はほぼ中学校区に1つ公民館が設置されている。地区は、人口26,871人、世帯数11,260世帯である。250年伝承される古江神楽があり、古い神社やお寺も多い。一方で宅地化も進み、多世代が暮らすまちになっている。地域学校協働活動として、地域ブランドである古江イチジクを次世代に継承するため、学校、住民、生産者、農協が連携して学習支援に取り組んでいる。古田地区は広島市全体に比べて65歳以上の人口割合が少なく14歳以下が若干多く、比較的世代の偏りが少ない地区である。

古田公民館は、昭和63年に建てられ、平成の時代とともに歩んできた。その平成の間に日本は2010年に人口のピークを迎え、急激に人口減少していく一方で長寿社会となり、人生100年時代と言われている。そこで、次の時代へのアプローチを考えて取り組んだのが、以下で紹介するプロジェクトである。主人公は中学生で、中学生に共感する大人たちとのプロジェクトである。この活動により、平成30年度に文部科学省の優良公民館表彰で最優秀館に選ばれた。

#### ◆プロジェクトが始まるきっかけ◆

高齢者だけが集まるサロンや子育て世代だけ集まるサロンはどこにでもあるが、「大人も子供も集まれる場所が無い。」「世代ごとに縦割りになっており、多世代が交ざり合う昔のような縁側が欲しい。」という住民の声があった。平成24年に多世代の居場所づくりを考えるワークショップを公民館で呼びかけ、そこで集まったメンバーで多世代寺子屋というグループができる。その



【プロジェクトのリーフレット】

ころ古田中学校の校長から公民館に「ESD (Education for Sustainable Development) という持続可能な開発のための教育の支援をしてほしい。」との相談があった。「テーマが大きすぎるので足元の地元から生徒たちが行動できるように、地域の中で学ばせたいので、地域と公民館で受け皿になってほしい。」とのことであった。多世代寺子屋のメンバーは、何度も話し合いを重ねた結果、大人になってもずっと暮らしてみたいまちの将来像を描き、そのために自分たちができることは何かを考え行動に移すことを多世代で学ぶこととした。これがプロジェクトのスタートである。平成25年の秋のことである。

#### ◆1年目の取組◆

中学校で募集をし、12名の中学生とサポートする大人たちでスタートした。ワークショップでは30年後にこのまちはどのようにになっているのかを語り合い、生徒一人一人が主人公としてどのように暮らしているのかを物語にした。その物語の中から共感できるキーワードを引き出し、今自分たちにできるテーマへと絞り込んでいった。そして決まった



テーマが「みんなが幸せに使える公園・遊び場をつくろう！大作戦」である。「子供たちの声がうるさい。」という騒音苦情があり公園が使いづらいという生徒たちの声が多かった。

公園の現状と課題を知るために、住民、行政、NPOから学んだり、アンケートをとったりして住民の声を集めていった。ところが騒音と捉える声は少数であったにもかかわらず、中学生は声を出さず、静かに遊ぶ時間帯を設定する解決策を提案してきた。この考えを住民へ提案し、体験イベントを開催したところ、大人たちはこの考えに愕然としたのである。「子供が黙って遊ぶ公園で良いのか」「もっと大人も地域のことを考えなければ」「もっと子供たちに向き合わなければ」と思うようになり、多世代の中に共感が生まれた。知らない子どもの声が騒音と感じるかもしれないが、顔の見えるコミュニティならそれは町の活力となる。静かに遊ぶ公園にするのではなく、子供たちを見守る顔の見えるコミュニティづくりのための公園にしていこうということになった。

### ◆3年目の取組◆

プレーパークに取り組み始める。プレーパークは、遊びの中で想像力や冒険心を育み、自分の責任の下で遊ぶ場である。子供たちだけでなく、多世代が集まれる場を目指し始まったのが「冒険あそび場 ワンダふるたパーク」である。ワンダふるたパークは3つのゾーンからなる。1つ目は、プレーパークゾーンで、手作り遊具や焚火のスペースがある。2つ目は、中学生たちが運営する、見守る大人たちがくつろげるカフェである。3つ目は、大人たちが遊びを仕切る場である。公民館のシニア向け地域デビュー講座からできた「あはは倶楽部」が趣味の大道芸を生かし、遊びを仕切っていくのである。

### ◆4年目の取組◆

イベントを年4回に増やし、毎回100人以上の参加者で賑わうようになった。アンケートでは、8割が公園の在り方を考えるきっかけになったと答え、このころから地域の理解が広がり、様々な協力が得られるようになった。子供会からは「会員減少で餅をつく若いお父さんが集まらない。」と相談を受けた。餅つき行事とワンダふるたパークを抱き合わせ、中学生が餅つきをし、できた餅で



【子供会との餅つきの様子】

ぜんざいを公園で振舞うようにしたところ、子供会とのつながりが強くなった。他にも、老人会が秋に落ち葉を集め、落ち葉のプールを作ってくれるようになったり、地元郵便局が活動の趣旨に賛同し、活動写真展を開いてくれたりした。

### ◆地域活動で大切にしていること◆

#### ①住民の“やりたい”から始まっている（自発性）

やってはいけないのが、行政が住民にお願いして活動を始めることである。担当者が変わったり、予算が切れたりしたら活動は戻すことになる。

#### ②まち（地域）に“おもしろい”があふれている（創造性）

おもしろいと人が集まる。公民館は地域というフィールドに人を送り込む基地であって、舞台袖のような役割がある。公民館は稼働率や利用者数で評価されがちだが、それだけではなく、シビックプライドをもった人たちが地域で育ち、地域で活躍する仕掛け

をするのも公民館の大きな役割である。

### ③いろいろな“わずらわしい”が混ざり合っている（多様性）

世代間のギャップで生まれるわずらわしさを敢えて楽しむ感性が必要である。このわずらわしさを乗り越えたときにコミュニティの付加価値が上がる。

### ◆持続可能なまち（地域）へ◆

持続可能な地域とは「人（住民）が外（戸外・公共空間）に出かけている地域」である。一人暮らしの高齢者、引きこもりや育児ノイローゼなど内へこもってしまっただけでは解決にならない。外に出て会話ができる、地域の縁側、井戸端のような場所が必要である。顔の見えるコミュニティは、人口減少社会のセーフティネットになる。住民自治の拠点となる公民館の役割はますます大きくなる。SDGs（持続可能な開発目標）の一つに「住み続けられるまちづくり」がある。この中学生のプロジェクトは、SDGsの基本理念である「誰一人取り残さない」に通じるものがある。

### ◇コーディネーターのまとめ◇

公民館は今、いろんな意味で注目を集めている施設である。当たり前のように存在しているが、まだまだ活用しきれていないところがある。

この事例は、地域住民の「まちの縁側」「多世代がごちゃ混ぜで集まれる場所」という声と中学校のESDの学びとを公民館がマッチングして、公園×幸縁になっているのが素晴らしい。SDGsは、最近よく耳にするが、ここでは平成24年から始まっていたという。

SDGsの始め方として、自発性（やりたい）、創造性（おもしろい）、多様性（わずらわしい）が挙げられている。特に多様性のわずらわしさが面白い点である。SDGsを何から始めていいかわからないときに、困っていることや、もやもやしていること、一見無駄に見えるところから始めるのもよいのではないだろうか。

### 先進事例2

#### NPOがコーディネートする人づくり・地域づくりの仕組み

#### 「砂浜しかない」から「砂浜がある」へ～建物が無い砂浜美術館の取組

高知県NPO砂浜美術館 理事長 村上 健太郎

### ◆まちの紹介◆

高知県の西南地域、四万十川エリアに位置し、面積188.47km<sup>2</sup>、人口1.1万人。日本一の漁獲高を誇る「土佐カツオ一本釣り漁業」や完全天日塩や砂地を生かしたサトウキビ栽培が盛んである。南海トラフ巨大地震の際は、最大津波予想高34.4mが想定された。

### ◆移住のきっかけ◆

秋に砂浜美術館で潮風のキルト展が行われる。砂浜に沿った松林でパッチワークキルトを野外で展示する。同じ時期にラッキョウの花を楽しむイベントがある。はじめてボランティアスタッフとして訪れる。そこに関わる地元キルターが楽しくしていたのが印象的だった。自分のまちを楽しむ取組に関わりたいと思ったのがきっかけである。

### ◆砂浜美術館とは◆

1989年に生まれる。大切にしているのは「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です。」というコンセプトである。4kmの砂浜が見方を変えると美術館である。企画展を行っているときだけが美術館ではない。365日24時間オープンしている。BGMは波の音、夜の照明は月の光、天井が空で床が砂浜、そして作品が風や波がつくる砂

浜の様、鳥の足跡、漂流物、ウミガメなど…である。関心を持てば、それが作品になる。そして、土佐湾（太平洋）にいるクジラが館長である。遊び心を持って地域にある資源を楽しむ発想である。砂浜美術館の作品とは、地域にある当たり前の風景や自然、まちの文化や営みなど少し見方を変えて、そこに新しい価値を生み出すことである。ありのままの自然こそが作品であり、そこから人と自然のつき合い方を考えていくのが大きなテーマである。潮風のキルト展、漂流物展、Tシャツアート展など様々なイベントを行っているが、イベントそのものが目的ではなく、砂浜美術館の考え方を伝える手段として行っている。

#### ◆これまでの歩み◆

##### ○ステージⅠ（1989～1994）立ち上げ

任意団体で、ボランティアベースで活動していた。地域の人達が本業とは別に集まり、様々な企画をしてきた。10年たつと周りの期待感が増すにつれて、負担感も増すようになり、これまで楽しんでやってきたのがやらされているようになってくる。

##### ○ステージⅡ（1995～2002）事務局体制の確立

一時期に集中していたイベントの時期を分散させ、1年を通して開催できる体制づくりを行った。

##### ○ステージⅢ（2003～2008）地域内組織との連携・調整

本業として取り組んでいけるように、NPO法人化し、観光関連の4団体を統合した。

##### ○ステージⅣ（2009～2013）事業体の基礎・組織基盤づくり

新しい事業への挑戦として、ケーブルテレビ番組制作、Webショップの運営、旅行業の資格を取得してスポーツツーリズムなどを行った。また、まちのイメージブランドだけではなく、地域の業者と連携しながらまちの経済活動につなげていった。

#### ◆Tシャツアート展◆

満潮時には水面にTシャツが映る、自然の力を利用した美術館である。Tシャツのデザインは応募で、1枚1枚違うデザインをTシャツにプリントし、ひらひらさせる。そして、潮の香りとともに1枚しかないオリジナルのTシャツを応募者に返すという一連のストーリーである。

このストーリーの参加者に4,500円を支払ってもらうものである。約1,000枚のTシャツがひらひらし、35,000人の来場者で賑わう。



【水面に映るTシャツアート】

課題としては、まちの外からは注目されるが、まちの中の参加が少ないことであった。まず、黒潮町のオリジナルの教育システムとして、4年生が全員参加し、地域理解と国際理解を学習することになった。大人になっていく子供たちが「砂浜しかない。」ではなく「砂浜が美術館である。」と胸を張って言えるようになってくれたらうれしい。他には、高校生はボランティアとして参加、大学生は企画側として参加するなどステージごとに教育機関と連携して取り組んでいる。次に、まちの人が廃校施設を宿泊所として利用し、ボランティアスタッフを受け入れている。そこで、まちの人とボランティアスタッフにつな

がりが生まれ、多くのボランティアスタッフがリーダーとなっている。

次に、まちの団体や事業者と連携した。郵便局と連携して、イベント期間中にポストを置いたり、ブライダル事業者と連携して砂浜結婚式を行ったり、まちの踊りの団体に砂浜のステージを提供したりなど、まちの人と楽しめる取組を行った。行政とのつながりも深く、まちの観光振興として一部委託事業が含まれている。イベントの予算は3分の1がTシャツを応募した参加者、3分の1が行政、3分の1が来場者による寄付金である。



【準備をするボランティアの様子】

#### ◆防災の取組◆

南海トラフ巨大地震の際に最大津波予想高 34・4m の数字にはインパクトがあり、特に観光の面で打撃を受けた。当時の新聞には、まちの存続が危ういという記事も掲載された。

まず、防災の基本思想を「避難放棄者を出さない。」とし、全町民が共有する合言葉を「あきらめない 揺れたら逃げる より速く より安全なところへ」と決め、犠牲者ゼロを目指している。

次に、防災教育も行ってきた。ただ単に、災害のメカニズムや地域の危険性、そしてその対応策に関する知識を習得することだけを目的にするのではなく、自分たちが生活する地域の自然との関わり方を学び、地域に誇りを持てるようにしている。2016年には「世界津波の日 高校生サミット」が行われた。そこで黒潮宣言「自然の恵みを享受し、時には災害をもたらす自然の二面性を理解しながら、その脅威に臆することなく、自然を愛し、自然とともに生きていきます。(一部抜粋)」が出された。自然は恵みを与えるとともに、時には大きな災いをもたらす、私たちはそうした自然の一員であることを認識に「自分の命は自分で守る」ことの大切さに気付く、海の近くで暮らす「お作法」を防災文化として育む防災プログラムを学習している。これまで、34・4m の津波予想高が人の来ない理由となっていたが、今では、この防災プログラムを学びに来る人が増えた。

#### ◆カンガエルバ(考える場)◆

昨年 30 周年を迎えた。砂浜美術館は考える場であることに気づいた。「砂浜しかない。」と考えてしまうと発想は膨らまない。「砂浜がある。」と考えることにより、想像力が膨らむ。自分たちのまちにあるものの見方を変えて見てみると、沢山の気づきと可能性はあるはずである。マイナスと捉えていたものが、見方を変えるとプラスになる。これからも考え方を大切に、共感を通じて多くの人とつながり、まちを楽しみ、その輪を広げていきたいと思っている。

#### ◇コーディネーターのまとめ◇

「砂浜しかない。」から「砂浜がある。」の考え方は、海士町の「ないものはない。」に通じるものがある。

地域の外からは評価されるが、地域の人々の参加が少ないのは、よく耳にすることである。黒潮町は小学校 4 年生の参加から始めたという。熊本県でもほとんどの 4 年生が通潤橋を学習する。同じ地域の人々が、同じ物語を学習することは素晴らしいことである。

防災の思想は、SDGsの「誰一人取り残さない」につながる。「砂浜しかない。」から「砂浜がある。」を学んだ子供たちの成果が黒潮宣言に表れている。

### 先進事例3

## 行政がコーディネートする人づくり・地域づくりの仕組み あいことばは「みんなで地域づくり」～地域はみんなで作る！～

千葉県四街道市政策推進課 係長 齋藤 久光

### ◆まちの紹介◆

千葉市に隣接する。人口 95,004 人（2020 年 8 月 1 日現在 男 47,502 人 女 47,502 人）、面積 34.52 km<sup>2</sup>である。人口の増加率は県内 4 番目にあたる。平成 20 年に「みんなで地域づくり指針」を策定し、みんなで地域づくりに関わる流れができた。

### ◆地域づくりのコーディネート◆

地域のニーズや課題の把握、課題の解決方法の検討、課題解決を担える人材の発掘、人材育成のための講座の実施、活動を支える相談活動等を行っている。

### ◆組織◆

課名は政策推進課→シティセールス推進課→政策推進課と変わっているが業務内容は同じである。まちの魅力を創造する一翼を担っている。平成 22 年に地域づくりの推進エンジンとなる「みんなで地域づくりセンター」を設置し、地域づくりコーディネーターを配置し、連携しながら地域づくりを行っている。

### ◆寺子屋プロジェクト◆

公民館で行われる小学生を対象とする学習支援・体験学習である。

学校には、学校の教育だけでは果たせない多様なニーズがある。学生には、ボランティア等多様な経験を積みたいというニーズがある。公民館には、利用者を多様にし、地域コミュニティを活性化したいというニーズがある。これらのニーズをマッチングさせたのが寺子屋プロジェクトである。



【子供たちに説明をする学生の様子】

テーマは「コミュニティ」「コラボレーション」「居場所」である。

平成 24 年 7 月に、教育学部の学生から「社会教育の実践の場が欲しい」と市に要望があったのがきっかけである。そこで、公民館で地域とつながることが出来ないかと考え、教育学部の学生ということで、8 月に公民館で小学生に勉強を教える活動を試みた。短期間ではあるが学生と小学生を募り、学生約 20 人、小学生約 100 人の参加があった。

平成 25 年は、市内の公民館に寺子屋が広がった。地域や学校で行っている学習支援などの取組をリサーチし、最初は、夏休み、冬休み、春休みの年 3 回単発で寺子屋を行ってきたが、子供たちや保護者からの要望が多く、学生同士のつながりを継続させる意味でも組織として「チームよつてら」を立ち上げた。同時に月 2 回の常設寺子屋の実施も始まり、地域の高校生も参画するようになった。グループLINEで気軽に連絡を取り合い、できるときにできる分だけ寺子屋に参加するというゆるやかなつながりができた。特筆すべきはOB、OGの存在である。学生の主体的な活動が基本だが、OB、OGへ気軽に相談で

き、縦の繋がりができている。寺子屋は、学生にとっても小学生にとっても学校の枠を超えたコミュニケーションの場となっている。

学びの質の向上を図るため、元教員や現職教員、教育学専攻の学生を交え、指導力の向上にも努めている。

企画会議は、当事者意識を持って参加し、1日の振り返りも全員で行い、反省点を共有している。高校生、大学生、社会人の立場を超えて自由な雰囲気話し合っている。

企画内容や予算、日程などは公民館の了承が必要である。公民館側も安全面などに配慮しながらも、なるべく学生たちが伸び伸び活動できるように配慮している。また、高校の校長への協力依頼は学生と公民館が一緒に行っている。

木工教室や書初めなど、学生だけで体験学習が難しいときには、公民館を利用しているボランティア団体やサークルと連携して体験学習を行っている。様々な団体の協力があり、内容が充実するとともに、地域コミュニティ形成の一助にもなっている。上記のような形での運営は数年前に転換期を迎え、現在は公民館が主導しながら学生などの人材の確保や調整を行っている。



【書初めの様子】

課題としては、学生のライフサイクル（2～4年）に合わせた体制作り、安定した人材確保、活動を支える地域（行政、施設管理者）の支援等が挙げられる。

今後の展望としては、誰もが参加できる場、成長の場づくり、中学生の活動への参画、地区の社会福祉協議会との連携等を目指して取り組んでいきたいと考えている。

〔参考〕平成27年度の予算（年5回の寺子屋の実施）

賃金 59,090 円、謝金 10,000 円、消耗品 46,176 円、食糧費 22,540 円、合計 137,806 円

#### ◆行政職員として大切にしていること◆

顔を出すことである。顔を出し会話をし、思いを伝え、思いを聞くことにより新たな関係性を築いていった。新たな関係性が更に新たな関係性を生み、新たな行動を生み出した。形式的な連携ではなく、必要性のある連携である。大きく活動を広げていくのではなく、みんなで合計が1になればよいと思っている。無理せず、楽しく続けていくための仕組みづくりをコーディネートしていくことが大切である。

#### ◇コーディネーターのまとめ◇

公民館を教育行政から一般行政に移す動きがあり、難しい状況にある。行政としては、まちづくりは、どこかの部署で対応するのではなく、全ての部局で対応して欲しいと思う。こちらの事例で、行政職員の方の姿勢として素晴らしいのは、顔を出すことである。業務として顔を出すのであるが、楽しくて顔を出す、うれしくて顔を出すことで、新たなつながりが生まれてくる。

「コーディネートとは何か」「連携とは何か」を考え明確にしていったところが素晴らしい。帳面消しでは何も生まれない。

「できることだけやる。」「無理をしない。」は、持続可能にしていくための大切な要素である。

## オンラインシンポジウム

### くわしく聞きたい！人づくり・地域づくりの仕組み

【田中】 3つの事例は、地元にあるものを使って、新しい可能性を見出していくときのワクワクやドキドキを様々な人と分け合っているのがおもしろい事例ですね。熊本では復興まちづくりに取り組んでいるが、復興という言葉が取れた時にどれだけ持続可能かということで、やり続けられること、やりたいことが大切である。いつも楽しいことをしようと思っている。それでは、3つの事例の共通点を教えてほしい。



【オンラインシンポジウムの様子】

【為政】 意識して取り組んだのは多世代である。世代が偏ってしまうと地域の課題が解決しにくくなってしまう。次の世代を巻き込んでいるという点では、共通していて、大切にしていかなければならないということを再認識できた。

【村上】 まちを楽しむところとわずらわしさがあるところが共通している。まちの中にはいろいろな考えや意見があるので、当然わずらわしさがある。それをトータルで楽しんでいるのが共通している。

【齋藤】 関わっている人の楽しんでいる姿が共通している。活動を仕掛ける側が課題を突き詰めてしまうと重くなってしまいが、解決方法やアプローチの仕方をみんなが興味関心を持ち、楽しむところをうまく拾って活動につなげていると感じた。

【田中】 動画配信だったので、事例発表の反応が無かったのはさみしかったと思う。自分の事例以外で聞いてみたいことはありませんか。

【為政】 砂浜美術館の遊び心や発想はどこから生まれるのか。

【村上】 「ひらひらします。」は、チラシを作るときに入れた言葉である。クスッと笑うことをいつも意識したり、1つの物事を複数の見方をして楽しんだりする雰囲気があるので、面白い言葉や発想が生まれてくるのだと思う。

【田中】 金子みすゞさんの「みんなちがってみんないい」をよく使う。多様性、多方面、多角的を大切にしていくことが勉強になった。

【為政】 四街道市は、様々な取組があったが、住民の声から始まっているのか。

【齋藤】 いつも現場に出るようにしている。社会教育に限らず子育てや福祉も含めて顔を出し、現場の声を大切にしている。自分の立ち位置はコーディネーターで、自分が主体的に動くとうまくいかない。寺子屋のケースは、大学生の声と公民館とつなぎ、公民館が主体的に活動するようにコーディネートした。公民館と密に関係を築いているので、公民館の主催事業として実施することができた。

【田中】 今の齋藤さんの話を、公民館の為政さんはどう思いましたか。

【為政】 全く同感である。私は、住民とのつながりと住民のニーズから始まっていることを大切にすることで、おのずと行政がかかわりやすい状況になるように感じている。当初の事業計画にはなくても、住民の声から始まった動きは実っていくこと

のほうが多い。住民のかかわりしろを持ちながら事業展開をしている。

【田中】「一番悩ましいのが、きっかけづくり」という質問があったが、ヒントをいただけた。私も「現場 100 回」とよく言われ、何か困ったら現場に行くようにしている。熊本地震の復興では、中間支援の人が少なかった。支援する人を支援するのは難しい。お二人の話には、中間支援の要素もあったと思う。

村上さんから質問はありますか。

【村上】活動に携わっている方の気持ちが変わった時を教えてください。良い方向に変わることもあるし、悪い方向に変わることもあると思う。

【為政】今回の事例では、中学生が、少数の声を切り捨てない考えで提案したとき、大人たちが驚く瞬間があった。この時が、地域の方々がさらに中学生を応援するようになった転換点である。

【齋藤】公民館は、取り組んでいることが硬直化する傾向にある。どこを切り取っても同じような公民館があるように思う。寺子屋に取り組んだ公民館は、化学反応が起こった。学生と関わるのは手間であるが、手間をかけて、その場を学生に委ねる覚悟があった。どの事業を行う上でも大切なことであると思う。

【田中】私もファシリテーターとして、物事を見るときに一部分を集中して見ないようにしている。全体を俯瞰的に見て、流れが変わるところを見逃さないようにしている。慣れとか当たり前になっていくことは大事だが、それに陥ると気持ち良すぎて、他のものを受け入れないようになる。為政さんも齋藤さんも、敢えて変化を受け入れたところに転換点があったように思う。

村上さんにも転換点がありましたか。

【村上】NPO 法人化して本業にしていくときが大きな転換点であった。

【田中】そもそも、スタートが大きな転換点ですよ。美術館は無くても砂浜があるという発想の転換から始まっている。いつでも誰でも考えられることだが、実行に移し形になるまでが難しいと思う。

齋藤さんから質問はありませんか。

【齋藤】四街道市は、プレーパークを業務委託している。年間 1 万人ぐらいの利用者があり、子育て世代の拠りどころになっている。継続した事業にするためにも行政の公園利用についての理解がどれぐらいあるか。

【為政】公園には「焚火をしてはいけません。」「ボール遊びをしてはいけません。」などと記してある。公園を管理している部署へ安全管理しながら何のために取り組んでいくのかを説明し了解を得た。目的が明確にあったので説得することができた。今、広島市では町内会単位のエリアマネジメントを検討している。公園は、どの町内にもある地域資源なので、その公園で公益性の高い収益活動を含むイベントを行うことで、その収益が町内会や子供会の活動資金になるような循環を作り出していくことを提起している。

【齋藤】公園は正に見慣れた風景である。公園を資源だと思わなければ、何も始まらない。公園に価値を見出してやると一気に活動が広がっていく。公園を活用できればいろいろなことが出来る。また、新たなアプローチを考えていきたい。

【田中】公園は、禁止事項が多いイメージがあるが、できることを一つ一つクリアしてい



くことが大切であることが分かった。

【齋藤】Tシャツアート展は全国でひらひらさせることができると思うが、地域へどのような効果を期待しているのか。

【村上】続けていく中で「自分のまちでもやりたい。」との声をいただくようになった。今、「ひらひらフレンドシップ」という、同じ思いの人と緩やかなネットワークを作っていくものがある。やりたいと思う人は、行政の方や商店街の方、まちづくりや福祉方面の方など様々である。見慣れた風景の価値をみんなと実感するための1つのツールとしてTシャツを使うと、新たな可能性が生まれるのではないかと思う。風景を作ることで、異業種の人がつながり、それがまちづくりにつながったり、商売につながったりする期待感のようなものが、Tシャツアート展に期待することなのだろうと思う。

【田中】地域資源に価値を見出していくことは、当たり前にも思っているとなかなかできない。皆さんは、価値を見出すスペシャリストですね。

それでは、苦労や上手くいかなかったことと、それを克服した話を聞きたい。

【為政】中学生は世代交代する。学年によって多いときもあれば少ないときもあるが、続けていくうちに、参加してくれるOBが増えてきたり、少ないときにこそしっかり向き合うことができたりした。プロジェクトをとおして、大人たちも子供たちも居心地の良い第三の居場所になっていくのがプロジェクトのブランドになっている。

【村上】Tシャツアート展に訪れた方に「地域の人顔が見えない。」と言われたことがある。運営側としては、大きな課題意識を持っており、その1つの解決方法として前に説明した小学校4年生の取組がある。興味のある先生は取り組んでもらえるが、異動してしまうと終わってしまうことの繰り返しに悩んでいたが、今では黒潮町の教育プログラムになっている。行政のキーパーソンに理解があったのだと思う。システム化していくと次の課題として硬直化が挙げられる。続けていくために何が必要か常に考えていかなければならない。

【齋藤】価値の置き方だけの問題であると思っている。上手くいなくてもよい。担い手が無理して活動を続ける必要はない。今、コロナで寺子屋ができず、学生との関わりが持てずにいるが、これでできなくなったら仕方ないと思っている。続けていくことが大切である一方で、続けていくことでマンネリ化し、続けることが目的になってしまえば、違う形で必要なことを見出していく方が地域にとって有益である。新しい活動へ移る人や団体などは歓迎し、行政として支えていく立ち位置で関わっていく。固執をしすぎない関わりをしている。

【田中】最後に、ポストコロナやウィズコロナについて考えていることを伝えてほしい。

【為政】今、プレーパークは再開しており、ルールを共有し、確実に実行していくことを大切にしている。公民館は、室内なので密となる。そこで、公園のように外に目を向けている。館外には、地域資源があり、地域資源を使ったアウトリーチ活動を行うと、不特定の人に公民館活動を知ってもらえる。さらに新しい広がりが見られる可能性がある。今後は、館外で行う事業の可能性をもっと考えていって良いと思う。

【村上】今年5月のTシャツアート展を延期し、11月に実施した。実施した時に「考えることをあきらめない。」と「抱え込まず、協力を求める。」の2つが大切であると感じた。この2つがあれば、次に進むヒントが見つかると思う。

【齋藤】コロナ禍で、団体に聞き取りを行ったところ「活動をやめようか。」との意見も多かった。「活動が必要とされているのか。」「取り組む意味があるのか。」と原点に立ち返った団体が多かったようだ。取り組んできたことを見つめ直す良い時間であったと思う。取組を整理し、良い意味で活動を止め、時代に合った形で再編することがあっても良いと思う。

【田中】ステイホームで家族とは何か、仕事とは何かを考え、様々な気づきがあり、前向きになることができた。また、是非熊本でお会いしましょう。

## エピソード

### ま と め

熊本大学熊本創生推進機構 准教授 田中 尚人

3つの事例に共通するものとして、居場所、ピンチはチャンス（課題改善）、子供たちと大人たちの関係、多世代・多様な人との関わり等が挙げられる。

ここで、「復興は木山中からプロジェクト」を紹介する。木山中の生徒が、30秒1カットの動画を作成し、益城町の今を未来の子供たちに伝えていくことが目的である。総合的な学習の時間を16時間使って動画を作成し、文化祭で発表する流れであった。プロのCM作成者、プロのカメラマンにも手伝ってもらい、プロジェクトがスタートした。学校内だけに留まらず、学校と地域をつなぐような公民館的な取組になるような展開を図った。事前に木山中の先生と話し合ったときに「やらされ感のない、生徒がやりたいと思うことを学ばせたい。」「自分たちで目標を掲げ、目標を達成し『やってよかった』と達成感を味わってほしい。」と先生の熱い思いに触れた。まずは、自分を語る自分のCMを作成した。作成したCMを視聴したとき、満面の笑みで「めっちゃオモロイ」との声が上がった。授業として大成功である。次は、キャッチコピーについて学習した。「コピーは作るのではなく選ぶ」「伝えたいことはシンプルに」などを学習した。実際の動画撮影では、演者だけでなく、プロデューサーやタイムキーパーの存在を知り、全員に役割があり1つの作品が出来上がっていくことを実感することができた。作成の方法は1つではなく、自分で考えていかなければならない。自分で方法を考える、自分に合った姿を考えることが大切である。徐々に生徒と先生とプロがつながり、1つのチームになっていった。形だけの連携ではなく、お互いに必要とされる連携である。時間が経つにつれて生徒たちは、地域資源を自分の言葉で語れるようになっていった。子供たちの心に火を付け、心に火が付いた子供たちを見て、さらに大人の心に火が付く好循環である。子供たちの発表を聞いて、「子供たちが生き生きしている。」「学校で学習していることを話してくれる。」「益城町のことを知ってくれることがうれしい。」と、涙する保護者の方がいた。

地域にある資源は当たり前のように思ってしまうが、熊本地震で当たり前ではなくなった。まずは、子供も大人も地域を知ることから始めることが大切。

「まちづくりと言わない、まちづくり」といつも伝えている。「多様性（誰かと一緒に世代を超えて）」「包摂性（誰もが変化や互いの違いを認め合う）」「持続可能性（楽しく、続ける）」が重要な要素である。「まちづくり」と、ことさらに言わなくても続いていくまちづくりをコーディネートし、「できるしこ（できる範囲で、無理せず）」「自分ごととしてとらえる」まちづくりを楽しもう。

# 令和2年度(2020年度)生涯学習に関する調査票

別紙様式 1

この調査は、県内の生涯学習講座の現状等を調査し、生涯学習振興を図るための資料とすることを目的としています。御多用の折とは存じますが、調査の趣旨を御理解の上、御協力いただきますようお願い申し上げます。なお、調査結果は、「調査研究事業報告書」としてまとめ、公表いたします。

## ○記入について

- ・ 選択式の質問は、該当する選択肢のセルに○印をつけてください。
- ・ 記述式の質問は、該当があれば内容を記述ください。

## ○提出について

御記入いただきました調査票は、令和2年(2020年)12月15日(火)までに、メールにて下記に御提出ください。

[提出先] 県教育庁市町村教育局社会教育課(担当:平川) メール:hirakawa-t-dr@pref.kumamoto.lg.jp

市町村名			所属	
記入者	職		名前	
連絡先	電話番号		メールアドレス	

## 本年度の主催講座・講演会について

問1 本年度、貴市町村の教育委員会(公民館等も含む)主催で、生涯学習に関する講座や講演会を実施しましたか。(予定も含む)

ア 実施した(する予定)

→ 問2へ

イ 実施していない(予定していない)

→ 理由:

→ 問3へ(3ページへ)

問2 問1で「ア 実施した(する予定)」と回答した市町村にお尋ねします。

(1) 本年度実施した(予定)講座や講演会の学習領域に○印をつけてください。[複数回答可]

- ア 健康
- イ 家庭・家族(子育て・家庭教育)
- ウ 環境／人口・食糧／資源・エネルギー
- エ 高齢化社会
- オ 生命
- カ 豊かな人間性
- キ 消費者問題
- ク 地域の連帯／まちづくり
- ケ 男女共同参画型社会
- コ 科学技術
- サ 情報の活用
- シ 国際理解／国際貢献・開発援助
- ス 防犯・防災
- セ 食育
- ソ 法教育
- タ 経済
- チ 起業
- ツ 人権
- テ 職業上必要な知識・技能
- ト 個人のキャリア開発
- ナ ボランティア活動の推進
- ニ 趣味的なもの(音楽、美術、華道、舞踊、書道、レクリエーション活動、スポーツ、料理、創作活動 など)
- ヌ 教養的なもの(文学、歴史、語学、科学 など)
- ネ その他

(2) (1)の講座等の合計実施回数を下から選んでください。(予定も含む)

- ア 1～5回
- イ 6～10回
- ウ 11～20回
- エ 21～30回
- オ 31回以上

(3) (1)の講座等の実施形態について、当てはまるものを選んでください。

- ア すべて1回ごとの単発の講座や講演会である。  
 イ 連続した講座や講演会もある。  
    (「連続した」とは、1つのテーマで異なる内容の講座を複数回実施すること)

(4) (1)の講座等の学習領域を選んだ理由は何ですか。〔複数回答可〕

- ア 地域の大きな課題だから  
 イ これまで継続して実施しているから  
 ウ 住民のニーズが高いから  
 エ 他の市町村でも実施しているところが多いから  
 オ 他部局や関係団体等との連携が可能だから  
 カ 講師選定が容易だから  
 キ 人が集まりやすいから  
 ク その他

(5) (1)の講座等を実施するにあたり、連携・協力した個人・機関(構成員を含む)がありますか。

- ア ある  
    連携・協力した個人・機関を下から選んでください。〔複数回答可〕

- ア 他市町村教育委員会(公民館等を含む)  
 イ 首長部局  
 ウ 学校教育関係機関  
 エ 大学等高等教育関係機関  
 オ 社会教育関係団体  
 カ NPO法人他、民間団体  
 キ 民間企業  
 ク (講座受講生などの)一般住民  
 ケ その他

- イ ない → 問2(7)へ

(6) (5)の機関とは、どのような内容や場面で連携・協力しましたか。〔複数回答可〕

- ア 企画時の相談、情報提供  
 イ 講師派遣等の人的支援  
 ウ 施設設備、機材教材等の提供  
 エ 参加者の募集等の広報面での補助・分担  
 オ 事業の成果を広めるための連携・協力  
 カ 経費面での補助・分担  
 キ 当日の運営面での作業分担、協力  
 ク その他

(7) (1)の講座等はどのような学習形態でしたか。〔複数回答可〕

- ア 講義・講演会形式  
 イ ワークショップ  
 ウ フォーラム・シンポジウム  
 エ 現地学習  
 オ 体験活動  
 カ 個別相談  
 キ インターネットにおける一方向の配信(リアルタイム・オンデマンド)  
 ク インターネットにおける双方向の配信  
 ケ その他

(8) 広報はどのような手段で行っていますか。〔複数回答可〕

- ア チラシ、ポスター配布
- イ 関係機関・団体への直接依頼(チラシの送付)
- ウ 回覧板での通知文回覧
- エ ホームページ掲載
- オ 広報誌掲載
- カ 広報誌以外の生涯学習に関する情報誌の発行
- キ SNSへの掲載
- ク 地域の無線利用
- ケ その他

(9) 講座評価をどのように行っていますか。〔複数回答可〕

- ア 参加者に対するアンケート調査
- イ 担当者等による評価
- ウ 外部委員による評価
- エ 講師による評価
- オ その他
- カ 実施していない

(10) どのような人が講師を務めましたか。〔複数回答可〕

- ア 生涯学習関係課職員や公民館職員
- イ 他部局の職員
- ウ 地域住民
- エ 県や他市町村からの派遣
- オ 大学・研究機関からの派遣
- カ 民間業者を介して依頼
- キ その他

(11) 講師情報をどのように得ていますか。〔複数回答可〕

- ア インターネット情報
- イ 住民(受講参加対象者)の要望
- ウ 他市町村に聞く
- エ 所属内で検討する
- オ リストを作成している
- カ 講座内容に関連した他部局や団体等に聞く
- キ 講師情報の提供を行っている機関等に聞く
- ク 例年同じ人に依頼
- ケ その他

(12) 住民が参加しやすいように、どのような支援を行っていますか。〔複数回答可〕

- ア 駐車場の確保
- イ 送迎バス等の運行
- ウ 託児の実施
- エ 手話通訳、要約筆記
- オ 音声ガイダンス
- カ スロープ、多目的トイレ等の設置
- キ 休日や夜間の開催
- ク インターネットにおける一方向の配信(リアルタイム・オンデマンド)
- ケ インターネットにおける双方向の配信
- コ その他

### 学習成果活用を目的とした事業について

問3 学習成果活用を視野に入れた講座(人材育成や仲間づくり、人材活用等)を実施しましたか。(予定も含む)

ア 実施した(する予定)

(講座名)	(内容)

イ 実施していない(予定していない)

問4 今後、住民への提供が必要だと考えられる学習について御記入ください。

--

### 子供を対象とした事業について

問5 本年度、子供を対象とした事業を何か実施しましたか。(予定も含む)

ア 実施した(する予定)

(事業名)	(内容)

イ 実施していない(予定していない)

### 生涯学習推進上の課題や悩み等について

問6 生涯学習を推進する上での課題や悩みがありますか。

ア ある → 問7へ

イ ない → 問8へ

問7 問6で「ある」と答えた方にお聞きします。課題や悩みの内容をお教えてください。〔複数回答可〕

- ア 住民のニーズの把握が難しい
- イ 講座企画が難しい
- ウ 人が集まらない
- エ 受講生が固定化している・新規受講生の獲得が難しい
- オ 講師選定が難しい
- カ 首長部局や関係機関との連携が難しい
- キ 講座等で学習したことを活動につなげることが難しい
- ク 予算が限られている
- ケ 職員研修の機会が少ない
- コ 職員数が少ない
- サ 研修等に関する住民からの相談や対応が難しい
- シ 住民同士のつながりづくりが難しい
- ス 施設の老朽化が進んでいる
- セ その他 

--

### 事業の見直し等について

問8 新型コロナウイルス感染症の拡大防止に向け、事業の開催や運営方法等で、工夫や新たな取組を実施しましたか。

ア 実施した(実施する予定)

(具体的に)

イ 実施していない(実施する予定はない)

(理由)

### その他について

問9 (1) 社会教育指導員に対する研修を実施していますか。(社会教育指導員が配置されていない市町村は「イ 実施していない」を選択してください)

ア 実施している(実施予定) → 問9(2)、(3)へ

イ 実施していない

(2) (1)の研修は、年間、何回実施していますか。数字を入力してください。

回

(3) (1)の内容を具体的に御記入ください。